
Bye-bye Baby Blue

春日彩良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B y e - b y e B a b y B l u e

【Nコード】

N 5 4 6 5 S

【作者名】

春日彩良

【あらすじ】

どこに居ても、何をしていても、あなたの声が耳から離れない。

あの頃、喧騒の中であなたが見せてくれた“空”に、僕は揃って恋をしていた。空になんて、焦がれなければ良かった……。

かつて一世を風靡したアイドルグループ“Z i o n”^{ジョン}。十数年に及ぶ彼らの、愛と憎しみと再生の物語――。

オムニバス形式の長編です。各エピソードは独立しています。本家小説サイト『お話 クローバー』にて連載したものを、まとめて投稿していますので、最新話をお読みにになりたい方は、下記のバナー

から本家小説サイトへお越しください。

怖いのは、あなたが居ないことじゃない。

あなたが居ないことに、慣れること。

当たり前前に傍にいた、あなたの姿を探さなくなること。

隣りにあなたがいないのに、それが日常に埋もれていくこと。

視界に映る不快なモノに耐えるために、思わずキリツと濃く真一文字に引かれた眉を寄せる。「怖いから止める」と若い時から幾度となく窘められてきた自分の癖だが、早々直るものでもない。寛容さは、大人になれば自然に身につくものではないらしい。

それを証拠に、テーブルを挟んで対峙した男には、僕の鋭い眼光が突き刺さっている。

だが、敵もさる者。

男は剥き出しの敵意を向けられても少しも怯む様子なく、ズイツと僕に向かって紙面の殆どをゴシッブネタで埋め尽くす、悪名高い週刊誌名が印刷された名刺を差し出した。

「この話は、一度事務所を通してお断りさせて戴いているはずです」

慇懃無礼な型どおりの挨拶をしようとする男を制して、僕は席を立とうとした。しかし男は、逆に椅子に両肘をついて、僕の方へ体

を乗り出した。

「藤原さん、確か新しい映画の話が決まったばかりでしたよね」
「どこでそれを？」

内々に話があっただけで、プレス発表は未だのはず……。そう思った瞬間、暗に肯定してしまった自分の返事に気がついて、ハッと口を噤んだ。しかし、もう後の祭りだった。
男はニヤニヤ笑いながら言った。

「いやあ、嘘のつけない人ですねえ。そんなところも人気の秘密ですか？ マスコミの情報網を、甘く見ないでくださいよ」

拗ねた子どものようなと思いながら、僕は今度こそプイツと顔を逸らした。

「その新しい映画の宣伝にもなる。あなたにとっても、いいタイミングなんじゃないですか？ 話題性があるってことは、イコール芸能人にとっての“旬”ってことなんですよ。あなたもいつまでも、『王子様』で売る訳にはいかないでしょう？」

「っな?!」

「とにかく、悪い話じゃ無いってことです」

激昂しそうになる僕を宥めるように、男は今度は猫撫で声で諭すように続ける。

「本当言つと、お宅の事務所の社長からも頼まれてるんですよ。本人がどうしても嫌だと言うから、直接交渉してみてくれとね。だから、今日のあなたのスケジュールも教えてくれた。お陰でこうしてテレビ局で待ち伏せ出来ました」

身近な人間の裏切りに、またも僕の頭には血が上ったが、売れない時代を支えてくれた恩義ある社長を無闇に責めることも出来ない。ギリツと唇を噛み締めながらも、今度は丁重に断ろうと少し口調を和らげた。

「対談インタビューといった類の仕事は、今まで受けたことがないんです。俺は話すのも得意じゃないし。だから、バラエティにだつて出ない」

名刺を突き返そうと手に取った僕に向かって、男は意味ありげに笑った。

「ああ、それは心配ないですよ。相手はあなたも良く知っている人です。話題に困ることはないでしょう。それに何より、相手方の事務所の方が乗り気だ。是非あなたを、と指名してきている」

「一体誰なんですか？ そんな知り合いなんて……」
「久住透です」

その言葉を聞いた途端、一瞬世界が凍りついたような気がした。

「考えてみる気に、なりましたか？」

男はそんな僕の様子を満足そうに見つめると、ゆっくりと立ち上がった。

「気が変わったら、そこに連絡してください。いつでも待っています」

それだけ言うと、男はさっさとその場に僕を残して背を向けた。

力を失った僕の手から、ヒラリと小さな紙の欠片が、空を掻きながら零れ落ちた。

「よく顔出せたもんですね」

事務所の応接室に通された男を、僕は長いと褒められる足を組み、腕組みをした体勢で出迎えた。

「そんなに威嚇するなよ」

オズオズと部屋に入ってきた男は、人の良さそうな細い目を更に細めながら、僕の対面に腰を下ろした。

「お前のひと睨みは、常人のその何百倍のパワーがあるんだって、教えてやっただろう？」

「睨まれるようなことしてるのは、そっちでしょう？」

僕はグシャグシャに丸めた名詞を、応接テーブルの上に投げ出した。

「一度は事務所を通して断ってるんです。収録現場で待ち伏せするなんて、ルール違反でしょう？ おまけに礼儀もなければ、品もない。いくら三流週刊誌とは言え、あんなヤツ記者失格だ！」

「お前にも、悪い話じゃないはずだ」

「あのろくでもない記者と、同じことしか言えないんですか？」

捲くし立てる僕に対して、宥めるように小さな声で囁いた男の言葉は、しかし僕をますます怒らせるだけの結果に終わった。

「そんなに話題性が必要なら、あなたがやったらどうですか？ 絶対数は少なくとも、あなたには根強いファンが居たでしょう」

「絶対数が少ないは、余計だ」

男は苦笑しながらボリボリと頭を掻いた。

白いポロシャツに、昔と同じ丸く刈り込まれた髪型は彼を実年齢よりも大分若く幼く見せていたが、笑うと無くなってしまふような細い目の端には、数年前までは見られなかった、深い皺が刻まれるようになっていた。

「俺は表舞台から退いたんだ。お前と違って、俺が今更出て行っただけだ、ファンはガツカリするだけだろ」

そう言って俯いた横顔に、どこか諦めにも似た微笑が浮かぶ。

僕は昔から、彼のそんな表情が苦手だった。

胸が詰まって、それ以上言葉を紡げなくなってしまう。

「あいつのマネージャーとして、頼む。あいつにとっては、やっと巡ってきた再起のチャンスなんだ。世間があいつを、思い出してくれるきっかけになるだけでいい」

顔を上げた時には、男の顔からそんな曖昧な表情は消えていた。

「俺のことはどうでもいいって？ 酷いよ、志郎さん」

僕が恨みがましい視線を向けてらると、今度こそ男は困ったように笑った。

「昔の仲間としても頼むよ。透だけじゃない。お前だって、もういい加減ケリをつけなくちゃいけないんじゃないのか？」
「ケリ？」

ピクリと眉を動かした僕を尻目に、男はそのまま立ち上がった。擦れ違い様に、僕の肩をポンポンと優しく叩いて応接室の扉に向かう。

「考えておいてくれ」

扉の前で振り返った男の目はやはりあの、僕が苦手だった、諦めをたたえた優しい微笑を浮かべていた。

あの時も彼は、こんな目をして僕を見つめていた。

どうして――？

目の前には、眩しいくらいの一面の白が広がっている。
目を焼く程に鮮やかな、染み一つ無いシーツの白い海。

昨日までそこを漂っていたであろうその海の住人の姿は、何枚シーツの波を剥いでも、見つけることは出来なかった。

まるでその海に溺れる漂流者のように、必死に伸ばした手の先に、シーツの白より更に白い、小さな紙切れが触れた。

手繰り寄せたその中に踊る小さな黒い字に触れた瞬間、どこからか獣のような唸り声が聞こえて来た。

慌てて顔を起こせば、白く光るシーツの海に、ボタボタと醜い染

みが出来て行く。それは止まるどころかどんどんその量を増し、つい先ほどまで顔を埋めていた一帯を見る見るうちに染めていく。

鳴り止まない唸り声と、シーツの海を汚す雨の出所を探すために当たりを見回した時初めて、壁にかけられた鏡の中に、狂ったように涙を流す自分の姿を見つけた。噛み締めすぎて切れた唇の端から血が滲んでいる。

「うわああああああ!!」

自覚すればもう、止まらなかった。

白い海の中に突っ伏してそれを手繰り寄せながら、深いドレープを描く波に額を擦り付ける。

獣のような嗚咽を繰り返せば、腹の底から強烈な吐き気がこみ上げて来て、ベッドの下を吐しゃ物で汚した。

「和臣っ!」

その時、ドアを開けて入ってきた男が、部屋の惨状に息を飲む。

「……………っ 志郎さん!」

溺れるものが藁を掴むように、必死にその足元に縋りつく。

「…………… 志郎さんっ…………… 何で?…………… 何で、こんなことっ……………」

吐しゃ物で汚れた紙切れの中の黒い文字を見た男は、何も言わずに深い哀しみを湛えた目で、縋りつく僕を見下ろしていた。

鏡の中に映る長身の男の首に、細く黒いタイを巻きつけて結ぶ。
キュツと力を込めた手の甲に浮いた筋は、数年前に比べれば随分
深く骨っぽくなっている。

「こんなところにも、年って出るんだな」

「何か言いました？ 藤原さん」

思わず口に出していた胸の内を聞かれて、僕は慌てて首を振った。

「いえ、何でもないです」

「タイ、曲がってますよ」

スタイリストの彼女が、背後に回りこんで僕のタイを締め直す。

「はい、出来た」

鏡の中の僕を見つめながら、彼女はうつとりとした視線を投げかける。

「本当に、藤原さんは何着ても似合いますね。背も高いから、洋服
の見栄えも違うし、モデルさんみたい」

「おだてても、今日は手持ちがないですよ」

軽口で返してやれば、傍にいたスタッフを巻き込んでクスクスと
笑う。

「幾つになっても、素敵だわあ」

鏡越しにそんな羨望の眼差しを受けても、自分の年齢のことは自分に自覚していた。

あれからもう、十年の時が過ぎた。

僕はもう22歳の若者ではなく、既に32歳の中年の域に入ってきた俳優だ。

元アイドル歌手——そんな肩書きを払拭するには、何年もかかった。

ステージに立っていた時よりも更に、人知れず血の滲むような努力を強いられた。

大根役者。

顔とスタイルだけの木偶の坊。

昔のファンしか、見られたものではない演技。

酷評には事欠かなかった。

ようやく、一人前の“俳優”として活動出来るようになったのは今から6年前。

26歳の時に主演した映画のヒットと共に、“俳優 ふじわら かずおみ 藤原和臣”の存在が初めて世間に認められるようになった。

歌を止めてからは、実に四年の歳月が流れていた。

もう昔の自分ではない。

ジョン ZIONの“和臣”ではないのだ。

志郎さんの言うとおり、もういい加減ケリをつけなければならぬ。

そう決心して、この仕事を受ける事に決めた。

浅い呼吸を繰り返してから、指定されたホテルの一室の扉をノックする。

どうぞ――

酒に焼けた淀んだ声――僕を怒らせることにかけては天才的だった、数日前のあの三流週刊誌の記者の声が僕を招く。

無意識の内にギュッとシャツの胸元を握り締めていて、先ほど折角スタイリストが直してくれたタイがグニヤリと歪んだ。

軽く、吐き気を覚える。

それ程僕は緊張していた。

隣りについていてくれたマネージャがノブを回して、扉が開かれる。

「あっ！」

それとほぼ同時に、部屋の中で優しい若草色のカバーが掛かったソファ―に腰を下ろしていた男が立ち上がった。

小柄な身体。

目をいっぱいに見開いて、少し決まり悪そうに口をパクパクさせてから、やがて、クシヤリと表情が緩んだ。

「久しぶりだね、和臣」

かすおみ
和臣――

そうやって、下の名前で呼ばれるのは何年ぶりのことだろう。

あまりにも久々過ぎて、それが自分の名前だと言うことに気付くまで数秒の時間を要した。

呆然と立ちつくしたままの僕を、隣りに控えていたマネージャーが軽く腰を押して前に進むように促す。僕の前には、差し出された小さな手が伸びていた。

「……お久し……ぶりです」

カラカラに乾いた喉から、ようやく搾り出すような声を発する。ジットリと汗で湿った自分の手を恥ずかしく思いながらも、誘惑に勝てずその小さな手を握り締める。

僕の手とは対象的にサラリと乾いたその手は、初めて握った時と少しも変わっていないかった。

そう言えば、あの時も僕は吐きそうになるほど緊張していた。そんな僕の手を最初に握ってくれたのも、小さなこの手だった。

自転車を急停止させた勢いで、斜めがけしたディバックが身体の前に戻りこんで来た。危うくハンドルを取られそうになって、よろけながらコンクリートの地面に足をついて身体を支える。

ポケットに忍ばせた名刺に記された住所は、確かにこのハズだった。

僕は一人、目の前にそびえ立つ、灰色にくすんだ雑居ビルを見上げた。

（ねえ、君。歌とかダンスって、興味ない？）

突然その声を掛けられたのは、今から二週間前。

いつもの塾帰り、母さんの目を盗んで、夕食前恒例のコンビニでの買い食いを楽しんでいた時だった。

同じ塾に通う仲間同士、まったく同じ姿勢で止めた自転車に跨り、安値が魅力のチュウチュウ吸うタイプのアイスを貪り食っていた時、目の前に止まった白いバンから降りて来た男は、真っ直ぐに僕を指して歩いて来た。

「オジサンは、こういうところの者なんだけど。知ってるよね？」

。。とか、××とか」

自らオジサンと名乗ったその男は、中高生なら（特に女子生徒なら）誰でも知ってる、メジャーすぎるアイドルグループの名を幾つか上げた。

「すげっ！　もしかして、スカウト？！」

当の本人よりも、周囲の悪仲間の方がざわめき出した。関係のないコンビニ客まで、立ち止まって僕らの様子を窺っている。

「気が向いたらさ、一度ここに遊びに来なよ。君ぐらいの年の子が、みんなレッスンしてるからさ」

男はそう言うと、突っ立っている僕に名刺を押し付けて、またさっさとバンに引き返した。

男の車が低いエンジン音を立てていなくなると、ワッと押し寄せてきた仲間に揉みくちにされた。

「すげえよ、すげえよ、和臣！」

初めて目にした“ギョーカイ人”は、あまりにもステレオタイプで、却って胡散臭い気がした。

加熱する周囲とは対象的に、僕の意識はもう今夜の晩御飯の方に向かっていた。中途半端にアイスなんか食べたから、ますます空腹が酷くなった気がした。無造作に名刺をポケットに突っ込んで家路を急いだ僕だったが、翌日、僕がスカウトされた噂は、学校中に広まっていた。

レッスンの見学になんか、さらさら行く気はなかったが、僕がその当時密かに思いを寄せていたクラス委員長の女の子が、僕が誘われた事務所所属のアイドル歌手の熱心なファンだった。

初心^{うぶ}な僕は彼女と共通の話題もなく、いつも遠目に見ているだけだった。

サインの一つも貰って帰れば、彼女と話ができる——そう入れ知恵してきた悪友の言葉に見事に引っかかり、僕は親にいつものように塾に行くと嘘をついて、一度だけのつもりで名刺に書かれた雑居ビルに向かい、今こうしてここに立っているのだった。

屋外階段を音を立てて上がっていても、人の気配がない。

本当にここでもいいのか？ からかわれて騙されているんじゃないか？ そんな疑念が頭をもたげながら、名刺に書かれた三階の思い鉄の扉を開く。

その途端、雪崩のように襲い掛かってきた音の洪水に、思わず僕は開けたばかりの扉を閉めそうになった。

耳がおかしくなりそうな大音響の中、狭いビルの中には、カラオケルームみたいな上部だけがガラス張りになった小さな部屋が幾つ

も並んでいた。

その中には、自分と同じ年頃か、それよりも幾分幼いか、様々な少女が各部屋に数名ずつ詰まっていた。

恐る恐る進んでいけば、突き当たりのガラス張りのドアに行き着いた。

中はこれまで通過してきたどの部屋よりも広く、前面がガラス張りになっていた。その中に、どこからこれだけ集めてきたのかと思うほどの少年達が入り乱れ、曲に合わせて激しいダンスを繰り広げていた。

生まれて初めて見る光景に、僕はただ息を呑んだ。

ガラス張りの扉に鼻を押し当てるようにして、目を凝らして中の様子を覗き込む。

「君、レッスン生？」

その時不意に声をかけられると同時に肩を掴まれ、我に返った。

「邪魔だから、入るなら入る。出るなら出る！」

そのまま肩を押され、ニユツと横から伸びてきた細い手が、僕が鼻を押し当てていたガラス扉を開く。

僕の肩を押した少年は、ヒョロツした背を丸めながら、勝手知ったる顔でレッスン室の中央に進む。丸い形にカットされた特徴的なヘアスタイルが、部屋の蛍光灯の明かりに照らされてツヤツヤと光っていた。

「そこ、座つてれば。邪魔にならないところ」

どうすればいいのか分からなくて、ウロウロと彼の後ろを着いて

行った僕に、少年は素っ気なくそう指示を出してくれた。

言うとおりに、フロアの隅で膝を抱えて座り込む。

かかっていた音楽の曲調が変わった。

僕でも知っている、最近ヨーロッパの方で大流行しているディスコチューンだった。

激しいビートに合わせて、皆が一斉に踊り出す。

その中で、一際目を引く少年が居た。

最前列で、鏡を見ながら汗の玉を飛び散らせ一心不乱に踊るのは、フロアの中でも一際小柄な少年だった。

目にかかる寸前のところで切りそろえられた癖のない髪が、彼が身体を切る度にサラサラと揺れる。

素人目にも分かる。

彼は、別格だった。

いつの間にか僕と彼の間には、深夜のロードショーで寝ぼけ眼で見たモーゼの十戒のような道が出来ていた。

人ごみは自然に掻き分けられ、僕と彼を阻むものが無くなっていったが、それは僕の意識がただそうさせただけなのかもしれない。

他の者は何一つ目に入らない。

音も聞こえない。

スポットライトを浴びたように、僕の視界の中で彼だけが踊っていた。

「それじゃあ、始めます」

そう言って、濁った声の記者は手元のレコーダーのスイッチを入れ、僕らの座るテーブルの間にそれを置いた。

「そんなに緊張しないでくださいよ。昔は同じ合宿所で、家族同然に暮らした仲でしょう？ もっとリラックスして」

そう言つて苦笑しながら、僕と僕の対面に座る彼を交互に見やる。僕は思わず天井を振り仰いで照明の位置を確認した。

全盛期の、見る者を焼き尽くすような強烈な光とは質を変えてはいたが、相変わらず彼は光をまとつていた。

錯覚ではない。

夏の強い日差しを遮るためにレースのカーテンを引かれ、少し薄暗くなつた室内においても、彼の周囲だけ、確かに陽だまりを背負つたように輝いていた。

意思とは無関係に早くなる鼓動を落ち着かせるために、ワザと時間をかけて足を組んだ。

そんな僕の様子を見て、彼が笑った。

「相変わらず、足長いね。羨ましいな」

屈託の無い笑みが、真っ直ぐに僕に向けられる。

「お前、いくつになつたの？」

「君、いくつ？」

音楽が止み、レッスンが終わった途端、僕は始めに僕をレッスン室に導いてくれた、丸い頭の彼に駆け寄って肘を掴んだ。

「あの人！ ああ、鏡の前で踊ってた人は、誰ですか？」

迷惑そうな顔をしながら振り返った彼にお構い無しに、僕は身を乗り出すようにして尋ねた。

「透だよ。久住透。レッスン生の中で一番の古株」

面倒臭くなった彼は、一言大きな声を出して、今も鏡の前で肩に掛けたタオルで汗を拭いている彼を呼んだ。

「おーい、透う。ちょっと来いよ」

「何？ 志郎。その子誰？」

「お前、誰？」

丸い頭の少年も振り返って僕を見る。

二人の視線を同時に受けて、僕は慌てて頭を下げた。

「あ……藤原和臣です」

「藤原……」

丸い頭の少年が、顎に手を当てて考える。そして、やがて閃いた！
「と言うようにポンと膝を叩いた。」

「こいつ、知ってる！ スカウト組だぜ。事務所の北さんが写真持ってた！」

「スカウト？」

小柄な少年も、アーモンド形の円らかな瞳を見開いて僕を見る。

「北さんが騒いでたぜ。スカウト自体何年ぶりだって。オーディションパスの」

そう言いながら、丸い頭の少年は僕の周囲をグルグル回って、憎そうに僕の足の先から頭の先までねめつけた。

「どうりで、可愛いモンね。女の子みたい」

アーモンドの瞳が今度はクシャリと細められる。

「それに足も長い。踊ったらきつと映えるよ」

少し舌足らずな幼いしゃべり方は、踊っている時の彼と同じ人物だとは思えなかった。

好きな子の気を引くために、アイドルのサインを調達に來ただけの僕だったが、親に相談もなく、その日の内に事務所に入ることを決めていた。

未成年の僕が勝手に契約するわけには行かず、結局後から親に連絡が入り、こっぴどく怒られたのは言うまでもない。

だがその日から、家と塾の往復だった僕の生活は一変した。

「和臣さんが合宿所に入ったのは……」

「16の年でした。高校一年生の夏です」

「透さんは？」

「13歳です」

記者がわざとらしく感嘆の声を上げる。

「まだ子どもじゃないですか。寂しかったでしょう？」

「僕は両親を早くに亡くしていましたから。合宿所の仲間が家族みたいなもので、ありがたかったです」

目の前の彼はスラスラと、まるで用意された台本を読むように淀みなく記者の問いに答えていく。

それを見て、また腹の底がキリキリとした不快感を訴えた。

曲がつてしまったタイに無意識に手をやり、ギュツと握りこむ。

何年もの時が経ちながら、未だにこの人を目の前にすると情けないくらい動揺してしまう。

だが、そう思っているのは自分だけなのか。

彼は、本当にこの状況を何とも思っていないのか。

それとも、何でもない風を装っているだけなのか。

どんなに盗み見ても、彼の表情から答えを見つけ出す事は出来なかった。

それならば。

僕もポーカーフェイスを貫くまでだ。

利害が一致するから引き受けた、これはビジネスだ。

だてに俳優業を続けてきたワケじゃない。

僕はカメラの前に立つ時と同じような役者の仮面を被り直し、記者に向き直った。

「俺も同じです。年上の人が多かったから、みんながお兄さんみたいでした。もうホームシックで泣くような年でもなかったし」

三桁を越すレッスン生の中でも、合宿所に入れるのは選ばれたごく一部の者だけだった。俗に言う、デビュー予備軍。つまり、レッスン生の中のエリート集団だった。

事務所に入つてすぐ、踊りも歌の経験も何もない僕までが、なぜかそのエリート集団の中に放り込まれた。

僕の部屋には、六畳のスペースに成長盛りの男4人が押し込まれていた。

唯一僕の自由になる空間は、僕に宛がわれた二段ベッドの下。段その斜め上で大イビキをかくのは、レッスン初日に出逢った、丸い頭の志郎さん。

僕の上には鏡の前で踊っていた透さんが寝て、僕の横にいるハズの住人は、いつも不在だった。

志郎さんのイビキに枕で耳を塞ぎながら何度も寝返りを打つ。

慣れないダンスレッスンのせいで、身体がバラバラになるような痛みを訴えている。

筋肉痛で死ぬるかもしれない。本気でそんなことまで考えた。身体はこれ以上ないくらい疲れているのに、頭が冴えて眠れない。一緒に暮らしている時は悪態ばかりついてた母や兄弟たちが急に恋しくなつて、16歳にもなつて情けないと思いながらも、声を殺して枕を濡らした。

無理やり息を止めようとすると、余計に苦しくなつて、ヒックヒックとしゃっくりのように嗚咽が込み上げて来た。

ふと枕から顔を上げると、僕の目の前に逆さまになった顔がぶら下がっていた。

「……ッ!!」

引き付けを起こしたように声も出せずに固まる僕を見て、その逆さまの顔はサラサラ揺れる前髪を残像を残して一旦引っ込んだ。

そして、二段ベッドのパイプを軋ませながら、灰色のスウェットの尻を突き出して、そつと僕の元へ降りて来た。

「和臣、ちよつと付き合つてよ」

そう言つて笑う透さんに手を引かれ、僕は部屋を抜け出した。

明け方の歓楽街を自転車で飛ばしながら、レッスン室のある雑居ビルに忍び込む。

「内緒だからね」

透さんは勝手知つたる顔で壁によじ登り、ブレーカーの電源を入れた。

その手馴れた様子から、彼がこうして夜中のレッスン室に忍び込

むのは、初めてでないことを僕は悟った。

明かりが漏れることを用心して、透さんはレッスン室の前面のオレンジ色のライトだけをつけた。

フロアの後方の闇の中に僕は膝を抱えて座り、光の中で踊る透さんを見つめていた。

それは贅沢な、僕だけのためのショーだった。

薄暗い照明の中で踊る透さんの姿を見つめながら、僕は自分がヒヨコになったような気持ちがあった。

生まれて最初に見る「動くもの」を親だと信じて着いて回るヒヨコ。

僕の世界で「動くもの」、僕の世界を「動かすもの」は、透さんだけだった。

「天は二物を与えないんだなあ」

レッスン室の鏡の前に胡坐をかいて、講師に見つかったらドヤされること請け合いのだらけきった格好でチヨコバーを齧りながら、志郎さんはさつきから踊る僕を見つめて笑いを噛み殺していた。

「何でそんなにカクカクしてんの？ ロボットダンスかよ？」

そんな彼の声を無視して、僕は透さんの背中を見つめることに意識を集中する。

同じように身体を動かしているつもりなのに、僕のダンスは長い手足をただバタつかせているだけの、酷くみっともないものにしかならなかった。

だが僕は飽きることなく、透さんの背中を追い続けた。

ヒヨコが親の後を追うのに、飽きるなんてことがないように。

居残り自主練の常習者だった透さんを追って、いつの間にか僕も周囲が引くほどの練習の鬼と化していた。
しまいには、からかっていた志郎さんが呆れて何も言わなくなるほどに。

追いかけても追いかけても、追いつけない憧れ。

目の前の背中を追うことに必死で、同じように、いや、もっと熱っぽい目で透さんの背中を見つめている視線に、その時の僕は気付いていなかった。

「えー、ZION^{ジオン}の皆さんは、デビューまでに三年間の準備期間があったと聞きましたが」

「計算が合わないでしょ？ もう時効だから言っちゃうけど、実年齢を隠してデビューしましたから」

サラサラと揺れる前髪を払う仕草は、昔と少しも変わっていない。

「デビューの時は、僕と志郎はもう22歳でした。公称では19歳になってましたけどね。和臣も19歳だけど18歳って、本当の年齢は彬^{あき}だけ……」

言いかけてハッと口を噤んだ彼に、記者はそ知らぬ顔をして次の質問を投げかけてきた。

「メンバーに対する第一印象は？」

「志郎は幼馴染ですから……初めて会ったのは、物心がつく前で覚えていませんね。隣にいるのが当たり前でしたから。和臣は……」

目の前にいる僕を見て、少し照れくさそうに肩を竦める。

「和臣は、とにかく可愛かったです。背は高かったけど、女の子みたいだった。今じゃこんなに男らしくなっちゃったけど」

「宮城さんもそうでしたよね？ 藤原さんと並ぶと、美少女アイドルかと思いましたよ」

一瞬の間が空き、僕は堪らず記者を睨みつけた。

唇の端に隠しきれない厭らしい笑みを張り付かせた彼を見て、僕は奴が確信犯だと言うことを悟る。

「……杉は」

何でもない風を装って答えようとする彼だったが、僅かな声の震えまでは隠しようが無かった。

あの男との出会いは、鏡の中だった。

いつものように透さんの背中を追いかけて必死に踊っていた僕は、不意に背中に冷たいモノを感じて顔を上げた。

鏡越しに、レッスン場の片隅で膝を抱えた男と目があった。

日の光に一度も当たったことが無いのではないかと思うほどの、

生白い肌。

一筆血を引いたような真っ赤な唇のコントラストが不気味で、僕は思わず背筋がゾツとした。

そんな僕の反応を見て楽しむかのように、赤い唇の両端が上がり、ニイツと笑みの形が作られた。

「彬っ！」

僕が毒気に当てられたように鏡の中の男から視線を外せないでいる間に、前で踊っていた透さんが振り返った。

「お前、レッスン出てくるの何日ぶりだ？！ 全く、毎回毎回サボって……」

音楽を止めて、透さんが部屋の隅の赤い唇に駆け寄る。

鏡の中で悪魔のような笑みを浮かべて僕を見ていた男は、透さんと向き合った途端に、憑き物が落ちたように年相応にはしゃぐ少年の姿に戻っていた。

それが、みやぎ あきひ宮城彬。

僕より一つ年下。

僕の二段ベッド横の、不在の主だった。

「今だから出来る話を、もっとぶっちゃけてくださいよ。当時はフアンの目を気にして、言いたくても言えなかったことも多いでしょ

う。本当のところどうだったんですか？ 恋愛の方は？」

「僕は、本当にサッパリでした」

頭を掻きながら、照れたように彼が笑う。

「透さんは、とにかくストイックでした。僕も、同じです。毎日ス
テージに立つことや、慣れないテレビの取材をこなすだけで精一杯
でしたから」

僕の助け舟に同調して、彼も苦笑する。

「第一そんな暇ありませんでした。僕らは、恋愛には人一倍疎かつ
たし」

それは、違う。

あなたは、それが恋だと知らなかっただけ。
それは、僕も同じだった。

僕の3歳年上の志郎さんに透さん、一つ年下の彬。

三年間に渡る六畳の牢獄に閉じ込められた僕は、Z I O N ジオンというグループ名を付けられて、鳴り物入りでデビューした。

デビューまでの期間が長かった分、嘘みたいに人気にはあつという間に火がついた。

昨日までスウェット一つでレッスン場の入っている雑居ビルの間を自転車で徘徊していたのに、一夜明けた途端に、一人でコンビ二にすら行けないような生活が始まった。

全員が十代かそうでないかは、ファン層に大きな影響を及ぼすとのことで、二十歳をとくに超えていた透さんと志郎さんは、事務所意向で年を誤魔化した。

僕もたった一つだったけれど、大人っぽい雰囲気を持つ彬とのバランスを取るために、18歳と偽った。

最年少コンビとして、彬と二人で取材を受けることも多かった。『退廃的』とも『厭世的』だとも称された彬は、最年少にも関わらず、何百年も生きてきた娼婦のようだと、僕はいつも思っていた。

特に年上の女性ファンから、セクシーだと騒がれていた彼だったが、僕にはどうして彼女たちが、彼の毒気に気付かないのか不思議でならなかった。

彼は、セクシーだなんてそんな生易しい言葉で括れる男ではなかった。

僕はいつも彼の横にいと、体温を奪われるような心地がした。

湿った爬虫類の目。

無知な少年に過ぎなかったあの頃の僕だけれど、本能的な彼への嫌悪感を感じていた。

その日も、彬と二人で雑誌の取材を受けていた。

その頃、19歳にもなりながら、僕は自分のことを『僕』と呼んでいた。隣りで女性記者に愛想を振りまきながら自然に『俺』と話す彬を見ていて、何だか幼い自分の物言いが急に恥ずかしくなってきた。

何でもない風を装いながら、ぎこちなく僕もいつしか『俺』と言うようになっていた。

透さんと二人で話している時、気が緩んで『僕』と言いながら慌てて言いなおした僕を見て、透さんは黙って僕の手をギュッと握って言った。

「やめなよ、和臣。お前には似合わない」

「どういう意味ですか？」

背伸びしても彬のようににはなれないと言われたような気がして、僕は思わずムツとして言い返した。

「何となく……だけど。折り目正しいって言うか……褒めてるんだよ？」

クシャリと頭を撫でられて、途端に機嫌が直ってしまう僕は、やはりまだまだ幼い子どもだった。

デビューから一年の歳月が経ち、過密スケジュールに反して、休日の僕らは、外に出てファンに騒がれないよう、あの六畳よりは多少広さの増した僕らの牢獄に、閉じこもることが多くなった。

もつとも、一応グループのリーダーである志郎さんは事務所やマネージャーとの打ち合わせに、奔放な彬は自由気ままに部屋を空けることが多く、残されるのはいつも僕と透さんだった。

歌と踊り以外に無欲な透さんは意外な程に子どもで、二十歳を超えても尚、ゲームや漫画が好きで、休みの日は部屋にこもってそれに興じることを苦とも思っていないようだった。

僕も寄り添うようにして、休日にはそんな透さんの小さな背にどんどん広く筋肉の突き出した僕の背をもたせ掛けて、手の中のポータブルゲーム機に意識を集中させた。

フラフラして危なっかしい彬を、映画の世界に閉じ込めることに決めたのは事務所の方針だった。

映画の台本を書いた中年の女性脚本家が彬のファンだったと言うのが表向きの理由だが、僕はその女性脚本家が彬の幾人もいる交際相手の一人だと知っていた。

「彬のヤツ、キスシーンがあるなんて言ってなかったよな」

僕の背を背もたれ代わりに使って、手の中のゲーム機を弄っていた透さんが、ポツリと独り言のように呟いた。

僕らは先週、彬の陣中見舞いに撮影現場を訪れたばかりだった。幸か不幸か、丁度その日が問題の彬のキスシーンの撮影日だった。

僕は、そこで初めて、人が恋に落ちる瞬間を目にした。透さんの視線の先。

伏せた瞼の影が白い頬に影を落とす、美しい横顔が彬のそれに重

なつていく瞬間、透さんの目は彼女に釘付けだった。

22歳の遅すぎる初恋。

彬が映画に借り出されている間、必然的に仕事の減った僕らは二人で合宿所にいる時間が長くなっていた。

彬のキスシーン相手の売り出し中の女優に恋をしてから、透さんは目に見えて元気が無くなっていった。

ほどなくして、彬がその新人女優とのデート現場をすっぱ抜かれると、いよいよ透さんはシュンと火が消えたように大人しくなってしまった。

「透さんも、練習すればいいじゃない」

思わずそう呟いた僕の声に、透さんがキョトンとした顔で振り返る。

「映画の話、来るかもしれないですよ？ 彬みたいに」

僕は背中に感じる透さんの体温を、前後に軽く揺らした背中で弾きながらけしかける。

「ほら、そのクッション使って。やって見せて下さいよ」

僕がふざけて手近なクッションを掴んで投げつけてやると、バフツと顔面に受けたそれを引っつかんで、透さんは唇を尖らせた。

「見てろよっ！」

勢い込んでそう宣言すると、透さんは手にした枕をソファーに押

し付けて、バフンツとバウンドするくらいの勢いでその枕に押し掛かった。

「それじゃあ、プロレスだよっ！」

僕は手を叩いてゲラゲラ笑う。ロープから敵が寝そべるリングにダイブするレスラーそっくりに見えたからだ。お腹を抱えて笑う僕に「何だよー」と言いながら不満そうにしていた透さんだったが、あんまり僕が笑い続けるから、とうとう吊られて笑い出した。

僕らは何がそんなに可笑しいのか分からなくなるくらい、仕舞いには涙まで流して笑い転げた。

「だったらさ、僕で練習すればいいじゃない」

ひとしきり笑い終えて僕がそう告げると、透さんは涙の滲んだ目尻を拭いながら、また冗談の続きかというような顔で僕を見た。

「一応、目も鼻も口も付いてるし。枕相手よりよっぽどいいと思わないですか？　ね？」

僕がズイッと乗り出すと同時に、狭いソファアの上で逃げ場を失った透さんは、僕が進んだ距離と同じだけ後退した。その拍子にバランスを崩して、ソファアにパスンツと音を立てて沈む。

追いかける僕の身体を下、僕の影に覆われた透さんのアーモンド型の瞳が、一瞬不安げに揺れた。

「……………ふざけるなよ」

横に背けた華奢な顎を掴んで、元の場所に引き戻す。

「ふざけてないよ」

意図せずに低くなってしまった僕の声に、透さんが小さく震えたのが掴んだままの肌から直に伝わってきて、僕の胸までザワリと音を立てた。

「僕らは、“彼女いない仲間”でしょ？　ちゃんと“その時”のために練習しとかなないと、彬たちに遅れを取りますよ」

もつともらしい僕の言い草に、またも思案するように透さんの眉根が寄る。

「……ね？」

そう言つて頬に手を伸ばし、そのままずらした親指で透さんの唇をなぞろうとしたその時、部屋のドアが開く音が僕らだけの室内に響き渡った。

透さんは弾かれたように身体を起こした。

「あ……あれ?!　彬、撮影は？」

「ああ、雨でロケ中止」

僕の身体の下から慌てて這い出した勢いでソファーから滑り落ちた透さんは、ペタンと床に膝を着きながら、上擦った声で彬を出迎えた。

やましい事はしていないはずなのに、僕まで鼓動が早くなり、訳もなく髪をかき上げたりして平静を装った。

「疲れたー。俺、シャワー浴びてくるわ」

彬に感づかれなかったことに胸を撫で下ろしながら、僕らはもうそれ以上何となくお互いに近づくことが出来ず、気まずい空気のまま背中を向け合って、もう興味も削がれてしまったゲームの続きに戻った。

手洗いに立った帰りにバスルームの前を通ると、いきなり現れた彬に道を塞がれた。

「何するんだよ？ どけよ。邪魔」

僕が邪険にそう言うと、彬はニヤニヤ笑いながら壁についた二本の腕で、僕の身体を自分の身体と壁の間に閉じ込めた。

「礼を言つよ、和臣」

「礼？」

眉を潜めて、相変わらず血を塗ったように赤く、意思を持った生き物のように蠢く彬の唇を見つめた。

「俺が構ってやれない間、俺の透と遊んでくれて」

「“俺の”？」

「あれ？ “お前の”だったあ？」

思う壺の僕の反応を気に入ったのか、彬は口角をいっぱい上げて笑う。

「でも、どうせ遊んでやるなら、もっとタメになることを教えてやれよ。そうだな……例えば、大人の礼儀とか？ こんな風に」

そう言った次の瞬間、血色の唇が視界の目前まで迫っていた。苦しさの方が先に経ち、本能的に“殺される”と思った。

酸素を求めて開いた僕の口を割って、息の根を止めるようにヌルリとした舌が入り込んでくる。意外なほどの質量を持つソレは、僕の喉の奥を塞ぎながら不埒な動きを繰り返した。

「……ン……ンーツ!!」

必死で彬の胸を叩き、口の中の異物を押し出すべく格闘する。ガリツという嫌な音と共に、その異物はようやく僕の口から出て行った。

顎の先へと垂れた唾液を拭くと、血の色が混じっていた。

彬はそんな僕を一瞥すると、口の端から流れた血を拭いてもせずに、ニヤリと笑ったまま何事もなかったように透の待つリビングへと消えた。

僕はバスルームに駆け込んだ。

拭っても拭っても、彬に犯された口内に彬の血の味が残っている気がして、水を流しっぱなしにして狂ったように口を濯いだ。

それでも腹の底から沸きあがる不快感は拭いようも無く、僕は涙を流しながら何度も嘔吐した。

「あれ？ バッテリーが切れた」

僕らを挟むテーブルの上に置かれたボイスレコーダーのランプは、先ほどの話の途中から何度か怪しい明滅を繰り返していたが、遂に完全に消えてしまった。

「ちょっと待っててください。新しいのと交換してきます。休憩しててください」

そう言つてそそくさと記者が出て行くと、部屋の中には僕と透さんだけになった。

合宿所では一番、一緒にいることが多くて隣りにいることが当たり前だった二人なのに、今はこの空間が何よりも居心地が悪い。

「……受けてくれて、ありがとう」

ポツリと先に呟いたのは透さんの方だった。

「お前が来てくれるかは、半分賭けみたいなものだったから」

気弱そうな呟きに胸が痛くなったが、僕は努めて平坦な声で応じる。

「あなたの考えていることなんて、僕にはいつも分からないことばかりだ」

「僕の考えていることなんて、いつだって単純だよ」

「歌とダンス」

すかさずそう答えてやれば、苦笑して頷く。

「そう」

僕はそんな反応が悲しくて、折角被ったポーカーフェイスの仮面をあっさりと脱ぎ捨てる。

「いつもはちつとも感じないのに、こういう時、僕は嫌って言うほどあなたが年上なんだって思い知るんだ」

「え？」

「僕より大人だったこと」

キョトンとした顔で僕を見る。

「嘘が上手い」

デビューから三年。

常にチャートのトップを走っていた僕らの人気にも陰りが見え始めていた。

次々にデビューしてくる後輩たち。

まるで恋をするように僕らを追いかける熱狂的なファンたちは、その熱が高ければ高いほど、冷めてしまう時は周囲も巻き込んで一気に潮が引いていくように冷めてしまう。

だが、僕らのアイドルグループとしての人気にこんなにも早く陰りが見え初めて来たのは、熱しやすく冷めやすいファンのせいだけじゃなかった。

メンバー間での、明らかな実力の差。

デビュー当時から指摘されていたそれは、ここに来て誤魔化し様もないほどの開きとなって現れていた。

酒や煙草で焼いた杉の声の劣化は、リップシンク（口パク）でしのげたとしても、たった一曲のダンスナンバーさえも最後まで踊りきれないほどの体力不足はどうにもならなかった。

杉の生活は目に見えて荒み、4人で暮らす合宿所にほとんど寄り付かなくなった。

帰らない杉のために、いつも部屋の明かりを点けて待っていたのは透さんだった。

透さんにソロデビューの話が持ち上がったのも丁度その頃だった。遊ばせておくには惜しすぎる透さんの才能は、業界のみならず誰もが認めるところだった。

僕が見よう見真似で俳優業をやり始めたのもこの時期だった。

杉がモデルの女の子を妊娠させ、中絶させたと週刊誌に報道されると、杉だけでなく、ZION^{ジョン}自体の人気も急落した。

毎日のように出演していたメディアへの露出も無くなり、仕事を干される日々が続いた。

ZIONとしての仕事がない中、僕は僕らの名前を忘れ去られないよう、個々の活動にますます力を入れるようになった。いつか、4人に戻るために。

彬にも何度も再起のチャンスが与えられたが、まるで破壊することを楽しんでいるかのように、彬はことごとくそれを不意にした。

僕らの願いは届かず、遂に事務所が下した最後通告は“解散”だった。

「ふざけるなよ、彬っ！！ お前の、お前のせいでっ！！」
「止める！ 和臣」

掴みかかる僕を、志郎さんが羽交い絞めにして止める。

彬は僕の一撃をくらって床に伸びたまま、虚ろな目で薄く笑っていた。

ずっとなんて、続くと思っていたわけじゃない。

アイドル歌手の寿命が短いことなんて、百も承知だった。だがそれでも、終わりは呆気な過ぎた。

まだだ。

まだ、足りない。

まだ僕はずっと、あの人の傍に居たかった。

そんな中で、事務所のせめてもの情けのように僕らの最後の全国ツアーが組まれた。

事実上の、解散ツアーだった。

なにもかも諦めたようなあの人は、彬を見ることも、僕を見ることがさえも無くなってしまった。

悟ったように、諦めたように。
ただ、歌だけに向かい合うあなた。
嫉妬すべきは、彬にではない。
終焉に向かうグループと一緒に、僕も徐々に手に入れられないあ
なたを、諦めることを覚えていった。
あの事件が起きるまでは。

汗を拭きながら、記者が新しいボイスレコーダーを持って戻って
くる。

「いやあ、お待たせしました」

テーブルに先ほどと同じようにセットし直すと、記者は遠慮がち
だが慇懃無礼に切り出した。

「そろそろ、核心に触れてもいいでしょうか？」

今日のインタビューの目的は、ソレだと、僕は初めから気付い
ていた。

これまでの取材は、『昔を振り返る』のキレイなお題目の元、丁
寧にお膳立てされた前フリに過ぎない。

「久住透、空白の二年間について……ファンが知りがっているのは、
そこだと思いますよ。一旦は声を失ったあなたが、単身渡英して、
ビルボードを賑わせるようになるまでの二年のことについて、聞か
せてください」

空白の二年間――

違う。

空白、なんかじゃない。

あなたにとってはある意味、人生で一番濃厚な時間。

もう二度と戻っては来ない、蜜月でもあった。

僕の知らない、あなたとあの男の……

最後の全国ツアーも東京での千秋楽を残すのみとなったあの日。

地に落とした評判も、魂を込めたステージの前では素直に評価された。

デビューした時から、僕らにはそれぞれイメージカラーが付いていた。

志郎さんは白（名前そのままだ、と言って本人は酷く不満そうだった）、透さんが青、僕は緑、彬は赤。

ライブなどでは、それぞれのファンが持ち寄った異なる色のペンライトを振りながら僕らに声援を送った。

緑色の、僕だけに向けられた光。

ステージの上からそれを見られる時間も、残り僅かだ。

“終わり”を少しでも伸ばしたいという意思の現われなのか、時間を惜しむように、ツアーの終盤では毎日のようにスタッフも交えて、酒に興じるための席が設けられた。

酔いつぶれる寸前で、スタッフの目を誤魔化して抜け出した僕は、そこで初めて随分前から透さんの姿を見ていないことに気がついた。へべれけになったスタッフたちの肩を掴んでは彼の行方を尋ねたが、誰も知らないと言う。

嫌な予感がした。

彬の姿も見当たらなかったからだ。

僕は酒宴が開かれていた貸切の地下のバーを抜け出した。

彼らの行方に心当たりがあったわけではない。ただ、虫の知らせと言ふべきか、ザワつく心に従って、夜明けの街を一人歩いていた。やがて、高架橋の下に辿りつく頃には、空は白み始めていた。そこで、僕は一生忘れられない光景に出会う。

青く澄み始めた東の空の下で、血塗れの透さんが横たわっていた。彼の体の上には、一塊の影が覆いかぶさっている。

影から又ツと腕が生えたかと思うと、振り上げた拳を躊躇い無く、既にグツタリと意識のない透さん目掛けて振り下ろした。

影は何度も何度も、狂ったように透さんを殴りつける。恐ろしすぎる光景なのに、僕は魅入られたように動けなくなっていた。

振り上げた拳の先から、赤い血の筋が飛ぶ。

透さんを染め上げていく、赤、赤、赤の雨。

振り上げた拳。

飛び散る血の筋。

会場の一角を埋め尽くす、赤いペンライト。

透さんの上に乗った彬は、狂ったように抵抗しない透さんを殴り続けていた。

だがその姿は、喧嘩の果てでも、ただの暴力でもないことを、僕には分かっていた。
分かってしまった。

拳を振り上げるたびに、彬は無言で「愛してる」と叫んでいた。
セックスよりもよっぽど、強烈でストレートな愛情表現に思えて、僕は思わずゾツとした。

*

「やりすぎだ。殺す気だったのか？」

病院の待合室で、拳に包帯を巻いた僕を、志郎さんは溜息交じりに見下ろした。

透さんを助ける名目で、僕に意識を失うまで殴られた彬もまた、病院へ運ばれた。

千秋楽は当然中止となり、その翌日、グループの解散と同じ日に、彬も何も言わずに病院から消えた。

透さんは病院での容態が落ち着くと、僕や志郎さんがマスコミから逃れるために取ってあったホテルに身体を移した。

透さんは、あの時のショックで、何よりもそれが透さんであることの証明にもなっていた歌を——声を失っていた。

皮膚を裂いた傷が治っても、透さんの声は戻っては来なかった。
怯えた小鳥のように震えるだけの透さんを、僕は献身的に世話を焼いた。

無防備に彬について行ってしまった明け方の事を思い出すのか、透さんが外を怖がるのをいいことに、僕は一切透さんを表に出さなかった。

「監禁する気か？ お前も、ちょっとおかしいぞ」

エスカレーンしていく僕の行動を志郎さんがたしなめても、あの頃の僕は聞く耳を持たなかった。

甲斐甲斐しく世話を焼く僕にうんと甘えてきたかと思えば、時々、僕を見つめる苦しい瞳に出逢った。

なぜ？ 僕は哀れまれる理由なんてないのに。

透さんを脅かす恐怖から、守ってあげているのは僕なのに。
苦しげな瞳の底で、あなたが何を考えていたのか。

当時の愚かな僕に出逢えるのなら、今こそ教えてあげたい。
あなたはずっと、怯えながらも、彬の行方を気にしていた。

僕は、あなたを守っていたんじゃないの？

ようやく手のひらの上に落ちてきてくれた小鳥を、檻に閉じ込めていたのは僕の方だったの？

そして、ある日突然。

手負いの小鳥は、僕の籠の中から飛び立って行ってしまった。
羽の代わりに、たった一枚の手紙を残して。

そこに書かれていた文字は、それ以上でも以下でもない一言。

『じゅんね』——

歌を忘れたカナリヤは……

「疲れた？」

無意識に口をついて出た鼻歌を聞きとがめたあの人が声をかける。永遠に続くかと思われたインタビューも、既に終わっていた。記者が気を利かせて二人で残してくれた部屋で、僕は幼いあの日々のように冗談を言い合って尽きない話に興じることもなく無言で、僕は窓の外を、あの人は部屋の中に、視線をさ迷わせていた。

「……この続き、知ってる？」

僕が問いかけると、あの人はすぐに続きを引き取って歌ってくれた。

後ろの山に、捨てましょか
いえいえそれは、可哀相

「あなたは、捨てられたんじゃないかった」

「え？」

「連れ戻されて、歌わされる方が苦痛なんじゃないかって……そう、思った」

「……和臣」

「どうして、別れたの？」

僕は窓の外の空から視線を外し、真っ直ぐに、あの人を見つめる。

たった一言の手紙だけを置いて、あの人が消えた後も、僕の日常は続いていく。

胸を掻き毟る夜を幾つも越えながら、それでも別れて二年が経つ頃には、無意識にあなたの姿を探すこともなくなっていた。

初めて雑居ビルの中にあるレッスン室であなたに出会った時の、背ばかり高くて頼りない、少年では無くなっていた。

僕はもう、26歳になっていた。

唯一残ったZIONのメンバー、志郎さんは僕を気にかけて時折会いに来てくれていた。

「頑張ってるな、エライエライ」

グループ最年長らしく、現役の時にやっていたのと全く変わらな
い厚みのある手で、自分より背が高い僕の頭をグシャグシャに乱す。
撮影中なんだから、折角セットした髪を崩さないでと文句を言え
ば、気取ってやがるな、昔はそんなじゃなかったのに、と言っ
てますます激しく僕の髪をかき回した。

「……透が、イギリスに行くことになった」

髪を掻き回す混乱に乗じて、小さく遠慮がちに囁かれた言葉は、しかし僕の耳の中に思った以上の重量感を持って落ちてきた。

「行く前に、会いたいかな？」

会いたいか？

そう問われても、素直に『会いたい』と言えるほど、僕はもう若くはなかった。

離れている間にも色々なことがありすぎて、過ぎた時計の針をそれほど簡単に戻せるものではなかった。

「……透は、一人だよ」

僕の心中を察してか、志郎さんは独り言のようにポツリと呟く。
この人のこういったさり気ない優しさに、何度救われたか分からない。

「本番入ります！ 藤原さん、スタンバイお願いします」

向こうでは、メガホンを握った監督と、今回の僕の相手役に選ばれた若手女優が、こちらの様子を窺っている。

「……僕、行きますね。志郎さん」

そう言って振り返った志郎さんの顔は、何か言いたげに僕と女優の顔を交互に見ていた。

「あなたは、知ってたはずだ」

ソファーを離れ、一歩、あの人の元へ踏み出す。

「僕の気持ちに、気付いていたはず」

一歩づつ、追い詰めるように、あの人との距離を詰めていく。

「本当に残酷な人ですね。あの手紙には、『ごめん』じゃなくて、『さよなら』って書くべきだったのに。だから、こんなに時間が経ってしまった」

あの人が立ち上がれないように、あの人の肩に手を置き力を込める。

「……ごめん」

「ほら、また」

「『さよなら』を言いたくなかったのは、俺の方だったから」

掴んだ肩を通して伝わる、少し痩せたあの人の震えに堪らなくなってしまうその頬に手を伸ばす。

両手で挟み込むようにして、上向かせたあの人の頬は涙に濡れていた。

覗きこんだ黒目勝ちの瞳の中に僕の姿を見つけた時、僕も同じように泣いているんだと気がついた。

あの人の手がスツと伸びてきて、頬を掴む僕の手の上に、そっと自分のそれを重ねる。

遠い昔に離してしまったこの手。

代わりに掴んだ手も離してしまったこの人と、それでも僕が再び手を握ることは出来ないと知っている。

未練を断ち切るように、スツと身体を離す。

途端に離れるあの人の体温が、しかしいつまでの手の甲に残っている。

それも断ち切ってしまうよう、場違いな陽気な声で告げる。

「僕ね、結婚するんです」

あの人が驚いたように顔を上げる。

「六年前に、初めて当てた映画の相手役でね。全然芸能人らしくない、単純で純粹なところが気に言ってます」

聞かれもしないのに、自分からベラベラしゃべる。

あの人に、何も言うて欲しくなかったから。

幸せに——なんて、間違っても。

「大人なのに漫画やゲームが大好きで、恥ずかしいけど、面白い子です」

「気に入ってるのはそこだけ？　酷いな」

あの人も、僕に合わせて笑って見せる。
違う。

気に入りは、それだけじゃない。

片手で包み込めてしまう、小さな手。

子どものような爪の形。

クセのない髪。

アーモンド型の瞳。

そう——あなたと、同じ。

でもきつと、だからきつと、愛せない——

*

長いインタビューが終わって、ホテルの部屋を出る。

横にいるマネージャーが、歩きながら先ほどの取材の時に撮影したポラのチェックをしていた。

「やっぱり、いいですね」

「何が？」

「和臣さんの座ってる、この若草色のソファですよ。肌の色が冴えています。カッコよく撮れてる」

「……僕、緑は嫌いだって言っただろ」

「この色、選んだの久住透みたいですよ」

思いもかけない言葉に思わず立ち止まる。

「これが、和臣のイメージカラーだからって」

ステージの上。

会場を染めるペンライトの海。

（優しい色だね。お前に、似合ってる）

不意に耳元に、あの人の声が蘇る。

汗ダクになつて踊つた後、擦れ違いざまに肩を抱かれて、そう耳元で囁いた、まだ幼い日の、透さんの声。

「和臣さんっ?!」

堪らず駆け出していた。

出てきたばかりのホテルの部屋の扉を、蹴破るようには開け放つ。

誰もいない部屋の中、開いた窓から入り込む初夏の風にレースのカーテンが翻る。

主のいないソファアの若草色の向こうには、澄み渡るような青空が広がっていた。

緑のペンライトが占める会場の上層階には、いつも決まって青い光が散っていたように。

「……っふ……う」

両手で押さえても、堪え切れない嗚咽が口元から漏れる。僕はそのまま、膝から崩れ落ちた。

窓の外の空は、そんな僕にはお構い無しに、高く青く澄み渡る。

地上に、置いていかれた緑にも、進む道はあるんだと。

例えこの先、再び青と抱き合える日が、気の遠くなるような地平の果てにあるのだとしても。

僕は歩き続ける。

あなたへと繋がる、苦く甘い“さよなら”の道を。

“さよなら”を言う日までは、別れではないと知っているから。

Ep1・Long way to say・goodbye【完

Ep2-1 (前書き)

ヒース
Hearth—

イギリス北部、アイルランド地方における荒涼とした大地。
農耕に向かないこの痩せた荒地の冬は、生物の気配もなく、ただ
色を失い吹きすさぶ風雨にもてあそばれる、不毛の大地が広がるば
かりである。

病室のドアの影からジーンズの細い足が伸び、続けて丸い頭がピヨコンとその姿を現す。

「親父さん！」

ベッドの上に身体を起こしていた男が戸口を見やると、ヒョロリと背の高い青年がケーキの箱を片手に入ってきた。

「志郎！」

かけていた眼鏡を外して、サイドテーブルに置きながら出迎える準備をする間に、志郎と呼ばれた青年は、目ざとく男の膝の上に乗せられたキーボードを見つけて声を上げた。

「うわっ！ 何してるんですか？」

近寄りながら、呆れた顔で男を覗き込む。

「こんなところで仕事？ いくら個室だからって、近所から苦情が来るよ」

「大丈夫、ヘッドフォン付けてるから」

そう言うので得意げに、首に下げた大ぶりのヘッドフォンを人差し

指に引つ掛けて、志郎に向かって誇示して見せる。

「知らないよ。みつちゃんに怒られても」

「検査入院くらいで、大げさなんだよ。お前も、見舞いなんかいいのに」

「目の前で倒れられたら、そういうわけにはいかないでしょ。本当にビックリしたんだから」

そう言つて、膨れっ面をして見せながら、ベッドの男へケーキの箱を押し付ける。

「ハハハ、確かに。お前は命の恩人だよ」

男は苦笑しながら、ありがたくその箱を受け取った。

「あら？ 志郎君」

その時、洗濯物の袋を提げた女が病室に入つて来た。

「わざわざ来てくれたの？」

「これ、我が命の恩人からの土産だ」

「まあ、嬉しい！ ありがとう」

ケーキの箱を受け取ると、髪を一つに結い上げた化粧つけの無い女は、目尻の皺を深くして微笑んだ。決して美人とは言えないが、人好きのする笑顔の持ち主であるこの女は、長年志郎たちが世話になつた事務所の宿舎の寮母を勤めていた。

「みつちゃん、止めないの？」

志郎は、親指で男の膝の上に乗せられたキーボードを指差して言った。女は苦笑しながら首を横に振った。

「この人から仕事を取ったら最後、本当に死んじゃうもの」

子どものいないこの夫婦にとっては、長年連れ添う中で生み出してきた“音楽”こそが我が子であり、夫婦の命だった。彼女が夫を見つめる視線からは、夫が生み出す“音楽”を、誰よりも何よりも慈しんできたからこそ、溢れるような愛情が見て取れる。

「はいはい、いつもながらご馳走さまあ」

氣心が知れた仲ならではの悪態をついてみせながら、志郎はこの夫婦が持つ変わらぬ空気にホッと息をつくような気持ちになる。特にこの一年、心の中がさくれ立つ様な日々を余儀なくされていた彼にとって、二人が揃っている場所は、久々に帰って来た我が家のような心地さえた。まるで、自分が彼らの本当の息子になったような気分で、甘えられる気がしていた。

歌謡界の大御所であり、志郎たちのボーカルレッスンの大師匠でもある男——高瀬順二を、だから志郎は昔から、恐れ知らずにも『親父さん』と呼んで懐いていたのである。

「……お前はまだ、宿舎にいるのか？」

「来週には出る予定だよ。代わりのアパート見つけるのに時間がかかってさ。都内は家賃が高くてね」

志郎が顔をしかめると、男はちやかすように言った。

「貯金くらいあるだろう？　さんざん稼いだはずだぞ」

「この先の当てもないのに、無駄金使えないでしょ？」

当てが無い――

何気なく口を突いて出た言葉が、妙な重苦しさを持って病室に沈んだ。

志郎がしまったと思った時には既に遅く、その場にいた三人とも
が次に紡ぐべき言葉を考えあぐね、しばし沈黙が続いた。

「……和臣は、どうしてる？」

その気まずい沈黙を、先に破ったのは高瀬だった。

だがその問いにすら、志郎はすぐには答えられず、口ごもるよう
に小さな声で呟いた。

「……一緒にいるよ。相変わらずだけど」

言葉には出さずとも、志郎の暗く沈んだ目が、渦中の彼の状態を
暗に物語っていた。

今をときめくアイドル歌手たちが住まう宿舍と言っても、その外
観までもが華やかなものではない。どの時代にもいる、俗に言う“
追っかけ”の少女たちがたむろすることを考慮し、事務所は都心の
一等地ではなく、交通の便がさほど悪くない、東京郊外にその居を
構えるのが通例だった。

志郎たちがデビュー以来ずっと世話になって来たのも、都心から離れた新興住宅街の中に立つ、小さなマンションの一室だった。

宿舎の前には、ブランコと砂場とベンチだけの、公園と呼ぶにはいささかお粗末な、小さな憩いのスペースがあった。宿舎と隣接するマンションの間に隠れるように位置するそれは、志郎たちが住む部屋の西側のベランダから見下ろすと、まるでマンションの中庭のように見えた。

その場所が、昔から大のお気に入りだったメンバーがいる。

ホームシックにかかってこっそり泣きたい時、メンバーの誰かと喧嘩してムシャクシャしている時、厳しいレッスンで怒られてしょげている時、藤原和臣はいつも、公園の中のただ一つの遊具であるブランコに腰掛けて、自分でも持て余してしまう気持ちをやり過ごすのを常としていた。

そんな時、志郎を始めとする他のメンバーたちは、少し離れた宿舎のベランダから彼を見守り、彼が自然に部屋に戻ってくるのを待つのだった。

大抵の場合、マンションの間に西日が落ちて辺りが暗くなると、和臣はキッとブランコをひと漕ぎして、一人で立ち上がった。ふと気付いてベランダから公園を見下ろせば、和臣の姿はどこにもなく、ただ無人のブランコだけが揺れている。そのすぐ後で、部屋のチャイムが鳴るのだった。

「和臣は食いしん坊だからね。お腹がすいたら帰ってくるんだよ」

能天気な透がそう言うと、和臣は不満げな顔をしたが「否定できませんね」と渋々頷いていた。

だが、あの頃と同じように、夕日がマンションの間に落ち、辺りが暗くなっても、ブランコの上の人影は動かない。

素通り出来ずに、病院の帰り、志郎は闇に沈んだ公園の中に足を踏み入れた。

ただ一つしかないブランコの椅子の上で、街灯の光に青白く浮かび上がるうな垂れた首筋は、スラリと細く、持て余し気味の長い足は、椅子からはみ出した格好で投げ出されていた。

志郎はツカツカとそのブランコに近づいて行くと、いきなりポカッとその頭を殴った。

「和臣」

ゆらりと頭を上げた彼の手には、半分握り潰されたビールの空き缶がある。

「酒くせえよ」

「……放つといってください」

黒のタンクトップ一枚の姿である彼は、そう言つと志郎の手を鬱陶しそうに払い除けながら立ち上がった。だが、すぐにバランスを崩して、ブランコの鎖に捕まりながらその場に倒れ込む。

「送別会してたんですよ。この宿舎ともお別れなんです。散々世話になったのに、だーれも挨拶無しに居なくなったら、ここだって可哀相だ」

そう言つて、手にした潰れたビールの空き缶をひっくり返す。まだ残っていた温い黄金色の液体が、タラリと公園の砂に吸い込まれていく。

「知ってたか？」

志郎の視線の先には、ベンチの上に和臣が脱いだと思われるシャツがある。

「いくら頑張っても、真夏に凍死なんか出来ないんだぜ？」

「……笑えない冗談は、止めてください。そんな気分じゃないんで」
眉間に皺を寄せながら、ブランコの鎖に身体を預ける和臣の横で、志郎はベンチに置かれたシャツから、和臣へとゆっくり視線を戻す。

「……お前、損な性格だな」

四隅をきちんと揃えて、律儀に折り込まれたシャツ。

酔って乱れても、脱いだ服は無意識の内にきちんと畳んでいる。
三つ子の魂とは良く言ったもので、志郎はこんな時、和臣の育ちの良さを実感する。それは彼自身が自然に持ち合わせている品性と言っても良いもので、彼の最大の武器であり、それ故に昔から彼自身を人一倍傷つけるものでもあった。

「もう帰ろうぜ」

「……嫌です」

「こんなところ、ファンやマスコミに見られたらどうする？」

和臣は目を閉じたまま、小さく鼻で笑った。

「いるんですかね？ まだ僕らに、ファンが」

あの夏から、一年――。

狂ったようにマスコミに追いかけられたことがまるで遠い昔のこと

とのように、周囲は静まり返っていた。

『堕ちたアイドル——』

『隠し切れぬ不仲説』

『メンバー間での暴行、失踪』

紙面には、凶暴な見出しが躍る。

「やめろっ！　こんなもの読むな」

和臣が手にとって広げたスポーツ紙を、横から奪い取るようにマネージャーの手が伸びる。紙面は和臣の目の前で、ビリビリと音を立てて真っ二つに引き裂かれた。

マネージャーは和臣の手に残った紙面の残骸までも奪い取ると、グシャグシャに丸めて、窓から車外に投げ捨てた。

その途端、いくつものフラッシュが一斉に焚かれる。

「志郎さん！　一言ください。久住透はどこへ消えたんですか？」

「メンバーの宮城彬に暴行されたというのは、本当なんですか？」

「志郎っ、こっちへ来いっ！」

マネージャーが志郎の腕を強く引き、窓際から引き離す。代わりに自身が窓辺へにじり寄って、シャッと音を立ててカーテンを閉め

た。

「何してる？ いいから、早く出せっ！」

運転手に櫓を飛ばして、強行に車を発進させる。

マスコミのフラッシュの雨を浴びながら、すぐ後続を付けて来るマスコミ車両を撒くために、志郎と和臣を乗せた車は幾つもの路地を迂回して、都内を逃げるように疾走した。隠れ家になっていたホテルが見つかり、その宿も転々と変えた。

テレビをつければ、ニュースやワイドショーがこぞって、このアイドルの不祥事を面白可笑しく取り上げていた。

『沈黙を守る、二名のメンバー』

そうテロップが流される画面で、ファンだと名乗る女の子が涙ながらに訴えている。

「本人たちの口から語られるまで、信じない」

何を語れって？

テレビの前、表情を無くしたまま画面に見入る和臣は思う。

色々な憶測が飛び交ったが、真実はその中のどれよりも、陳腐で残酷な代物だ。

「……志郎、ちょっと来い」

マネージャーがそつと、狭いホテルの脱衣所に志郎を手招きする。

「……見張つてろ」

自殺でもするんじゃないか。

呆けたようにテレビの前に座り続ける和臣を親指で示しながら、マネージャーが深い溜息をつく。

彼に言われるまでもなく、志郎もずっと同じ気持ちで和臣を見ていた。

『ごめんね——』

何度やつても勝てないゲーム。

自分からしつこく誘ってきたくせに、コントローラーを手にテレビの前に胡坐をかいて陣取った透さんは、もう何敗目になるかわからない、先の見えた絶望的なゲーム展開に焦れきった声を上げた。

（あ”ーっ！！ もうヤメッ！）

そう叫ぶなり、ゲーム機本体のコードをブチッと抜いてしまった。

（ちょっと！ 何するんですか。まだ途中ですよ）

（知らないっ！ お前ばかり、ズルいよ。年下のくせに、少しは先輩に譲れっつんだ）

（何が“譲れ”ですか。手え抜いたら抜いたで怒るくせに）

ワガママも甚だしい、僕より3つも年上のこの子ども染みた先輩は、あるうことか子どもそのものの暴れ方で、フローリングの床に仰向けに寝転がり、手足をバタつかせたついでに、隣りで胡坐をかいていた僕の膝を蹴っ飛ばしてきた。

（ちよっ！ 痛いですよ。何するんですかっ！）

恥も外聞も無い捨て身の攻撃は結構本気で痛くて、僕は悲鳴を上げる。

（うるさいっ！ バーカ、バーカ）

語彙力の乏しさを露呈しながら、まるきり子どもに戻ってしまった彼の攻撃が止む気配はない。

（いい加減にしないと、本気で怒りますよ）

遂に堪らず、僕は身を翻して、彼の体の上に乗り上げる。

手首を押さえ込んでやれば、勝ち目のない体勢に今更気付いた透さんは、そこで初めて自分が取り返しのつかない事態を引き起こしたことを悟る。

威圧感たつぷりに透さんの身体を見下ろす僕を見上げて、彼はゴクリと喉を鳴らして唾を飲み込んだ。

だけど、そこで怖気づいたのは僕の方だった。

小さく上下する喉仏の動きに魅せられて、僕の方が違う意味で怖くなった。気まずさに、彼の手首を解放して彼の身体からソロソロと退散する。

（きちんと謝るまで、もう透さんとは遊びませんから）

取り繕うように怒ったポーズを決めて、僕は自分の部屋に逃げ込んだ。

夜になり、そっとリビングを覗いてみると、透さんはまだそこにいた。

電気も着けずに、ソファアーの上で膝を抱えたまま、クッションに顔を埋めている。

謝るのが苦手な透さん。

僕より3つも年上のクセに、大きな子どものままの透さん。

だから、僕から近づいてあげる。

謝るきっかけを、与えてあげる。

裸足のままりビングへ近づくと、僕の気配に気付いた透さんがクッションから顔を上げた。

（……な、何だよ？）

（何か、言うことがあるでしょう？　僕に）

そのまま、透さんの座るソファアーの上に乗り上げる。

（別に、何も無いよ）

（素直に言ったら、許してあげますよ）

（だから、何を？）

（“今”なら、許してあげます）

そう、
“今”なら――

（まだ、間に合います）
（――和臣）

「……和臣？」

ソファーの上、大の男二人分の体重を支えたスプリングは、錆びた音を立てて軋んだ。

「どうした？」

目の前には、トレードマークの丸い頭と細い目尻。

「寝ぼけたか？」

そう言う彼の方が、寝ぼけ眼を擦りながら、和臣を見上げている。目の前の状況にしばらく頭が付いて来れずに、和臣は男の上に覆いかぶさるように乗り上げた体勢のまま、彼を凝視する。

「……おい、大丈夫か？」

いつまでも動かない和臣を心配して、男の手が下から伸びてくる。寝汗に濡れた額の髪に触れられた時初めて、和臣はハッと我に返った。

周囲を見渡せば、暗闇の中でも白々しく明るい無機質な壁。

ここは長年メンバー4人で暮らした宿舎ではなく、目の前の男はゲームに負けて、幼い喧嘩を吹っかけてきたあの日の少年でもない。

「……何でも、ありません」

キシツとスプリングが沈み込み、膝を立てた和臣がソファから身体を起こす。

踵を返して自分の部屋へと引き上げていく和臣の後ろ姿を、志郎は黙って見送った。

デビュー前の準備期間も入れたら計六年、普通なら高校や大学へ通い青春を謳歌するはずの貴重な時間の全てを、厳しいレッスンと修行僧のようなストイックな生活に注ぎ込んできた。

自分たちを見出し育ててくれた事務所への恩に、報いるだけの働きはしてきたと自負している。

だが、元々解散が決まっていたこととはいえ、後ろ足で砂をかけるような唐突な終わり方をしたことで、これまでの功績をもつてしても事務所に償い切れない損害を負わせてしまったことも事実だった。

事務所の看板を背負って立っていた^{ジョン} Z i o n が最悪の醜聞を残して自然消滅してしまった今、残された志郎と和臣の芸能人としての価値は暴落し、手元に置いていても事務所にとってのメリットは皆無に思えた。

事実、^{ジョン} Z i o n 解散前に決まっていた和臣の主演映画の話は、暴行事件の露見と共に立ち消えになった。内々に、バラエティー番組の司会の仕事を持ちかけられていた志郎も同様だった。

しかし、都内を逃げ回るように転々とした拳句、社長室へ呼び出され解雇宣告を受けると覚悟していた二人にかけられた言葉は意外なものだった。

いい機会だから、少し休め――

ねぎらいの言葉と共に、社長は当面の間の二人の身の置き所を手配してくれた。

これが、千秋楽も踏まずに解散を余儀なくされたZion^{ジオン}の、取り残されたメンバーである二人への同情と、これまで血の滲むような努力をして青春を捧げてきた教え子たちへの、事務所としてのせめてもの情けの気持ちの現われだと分かっていた。

それでも、突然華やかなスポットライトの下から、明日をも知れない状況に突き落とされた志郎と和臣にとって、それがどれ程ありがたいことか知れなかった。

周辺が落ち着いてきた頃を見計らって、四人で暮らした宿舍へ戻ったのは秋も終わりの頃だった。

志郎は毎朝早くに起きてジョギングをし、それが終わると朝食を食べてジムへ行き、そのままダンスレッスン。夕方には帰宅し夜十時には床に着くという、デビュー以来経験したことのない、判子でついたような規則正しい生活を送った。

「どういう風の吹き回し？ 練習嫌いによくスタジオで寝そべって高瀬先生に怒られてたのに」

飽きもせずと同じ生活を繰り返す志郎に、和臣が呆れ顔で問いかける。

「あの頃は、嫌でも毎日レッスンさせられてただろ？ 強制されると、反抗したくなるのが人間の性ってやつなのよ」

「今は強制されないから、やりたくなるって？ 志郎さんて、天邪

鬼なんですね」

「失礼な！ あの頃だって俺は怠けてたわけじゃないぜ。地獄のレスンに耐えるために、体温温存してただけ。それに、今の状況で食っちゃ寝してたら、折角のパフォーマンスが重力に負ける。俺も、もう25だし」

そう言つて、わざと胸の前で手を組んで、ボディービルダーの真似事のようなポーズを取つて見せる。和臣を笑わせようとしているのに、当の和臣は失笑といった様子で、首を横に振りながら、手にしていた雑誌に目を落とした。

「お前もモデル体型とか言われて安心してたら、あつという間にメタボ中年になるぞ。その時、この俺様との差に気付いて嘆いても遅いんだぞ」

「僕は志郎さんと張り合う気なんかないですよ。メタボ中年で結構」
「あー、可愛くねえ」

志郎は歯を剥き出して、このつれない弟分にイーツをして見せた。

「いつもの時間に帰るから」

「分かってます。本当にその規則正しさって、志郎さんて犬か、さもないやお爺さんみたいですわね」

「何とでも言え！ どうせ俺は昔から、チームの“お父さん”。年寄りくさいって言われてたしな」

志郎は生意気な弟をまともに相手にすることを諦めて、さっさと玄関へ向かった。

「和臣」

玄関で脱ぎ捨てられたスニーカーに足をつっ込みながら、志郎が声をかける。

「お前も、大学行けば？ 最後の年だろ」

雑誌の記事を追っていた和臣の視線が止まる。

足首が飛び出した、サイズの合っていない灰色のスウェット姿で、一日中自室か、少し気分のいい時はリビングか、いづれにしろ宿舎に籠もってばかりいる自分への、志郎とマネージャーの気遣いだということとは充分に分かっていた。

自分でも、このままではいけないと思っている。

未だ外に出る気にはなれなかったが、志郎がジムへ出かけた後、一人になった部屋に籠もっていても、気が狂いそうになるばかりだった。

『大学へ進学すること』を条件に事務所入りを渋々許してくれた両親との約束を果たし、全盛期の過密スケジュールの中で猛勉強をして、一般入試で合格した大学だったが、入学以来まともに通えたことが無かった。

時間が解決する――。

月日が経てば、少しずつ穏やかな日々を取り戻せる――。

周囲の慰めの言葉を斜に構えて素直に受け入れられない反面、その言葉に本当は誰よりも縋りつきたい自分がいた。

秋の終わり、和臣はほとんど通うことのなかった大学へ復学願いを出した。

いつか、忘れられる――。
その頃はまだ、そんな淡い夢すら抱いていた。

通称“金魚鉢”と呼ばれる録音ブースの中で、志郎はキーボードを指で弾きながら、それに合わせて発声練習を繰り返す。

「アー、アー」

腹を押さえて腹式呼吸を意識して発する彼の声は、ブースの中に深い響きをもつて木霊する。

「おー、やってるな。悪ガキ」

防音扉を開けて、突然、練習生時代からの恩師である高瀬が入ってきた。

「ちよっ……“悪ガキ”はないでしょ。酷いな、親父さん」

志郎はキーボードを操る手を止めて、高瀬を振り返った。

「正真正銘の悪ガキだっただろ？ 事務所に入っただのは小六の時か？ ここは遊び場じゃないって、何度も怒鳴ったよな。お前も透も、手の付けられないお調子者だったから。でも、逃げ足の遅いお前が、いつも捕まって怒られてた」

「昔から、損な役回りなんだよ」

フツと顔を背けて苦笑する志郎に、高瀬は優しく微笑んで言った。

「それは、違うさ」

高瀬はゆつくりと志郎の傍まで近づいてくると、静かに椅子を引きキーボードの前に座った。

「お前は、優しすぎるんだ。透が怒られないように、いつも一歩遅れてわざと捕まってた」

啞然とした表情で振り返る志郎の前で、高瀬はピアノを弾くには太く肉のついた短い指を鍵盤の上に滑らせる。

「歌と同じ。不器用なんだよ。お前は、昔から」

『志郎っ！ また、キー下がってるぞ』

舞台袖のスタッフが大手を振って、鳴り響いていた音響を止めさせる。

ステージの対面に位置する音響ブースの中には、遠目にも“鬼”とあだ名される練習生の恐怖の的である歌唱指導者、高瀬順一が陣取っているのが分かる。

スピーカーを通して鳴り響く彼の怒鳴り声が、ステージに立つ志郎たちを震え上がらせる。

まだ、ジオン Z i o n としてデビューする前。

練習生の中から選抜された4人での仮ユニットの時代だった。

チーム名さえ決まっていなかったが、業界関係者のみならず、抽選で選ばれた一般客も入れて、デビュー予備軍のお披露目と人気度合いを計るための大掛かりなライブイベントで、事務所が選んだ、志郎たち4人以外のいくつかのユニットも共演していた。

テレビでは既に先輩アイドルのバックダンサーとして出演したことは何度もあったが、自分たちだけが主役の舞台は初めてだった。

同じ事務所のライバルたちとの競争と駆け引きの場でもあり、必然的に気合の籠もった舞台になった。

『お前だけ、音程が悪すぎる。どうにかしろよ、志郎』

何度も曲が止められ、その度に志郎はステージの上で硬直する。耳に挿したイヤホンに手を当て、必死で流れてくる音楽と自分の発する音を合わせようとするが、気持ち焦れば焦るほど、高瀬の要求とは程遠いパフォーマンスしか出来なくなる。

『和臣っ！ お前、さっきからマイク吹いてるぞ。デカイ声出せば良いってもんじゃないんだから』

続けざまに、隣りで歌う和臣にも容赦なく高瀬の檄が飛ぶ。

高瀬によくたしなめられた、和臣の癖だった。

それはデビュー後も、ファンの間で“爆音”とあだ名されるようになる、立派な体躯から繰り出される、行き過ぎた彼の声量の問題だった。

年を重ねるにつけ、マイクを破壊するような“爆音”は収まって来たが、この頃はまだ腹筋を使つてのコントロールがままならず、しばしばキーンツという強烈なマイクの不快感を出して、音響スタッフを悩ませていた。

『彬は、和臣の半分でいいから声だせっ！ 蚊が鳴いてるんじゃないんだから』

全ての練習生を合わせても、高瀬に怒鳴られないのは、透だけだった。

透だけは別格だと、高瀬も認めざるを得なかった。

透の歌は、魂の歌声。

指導の域ではないと、いつか高瀬がスタッフに語っているのを志郎は聞いたことがある。

魂に教えるべき技巧はない――

スポットライトの下、光の下で生きていく運命にある男だと。

*

非常階段の下が、誰も知らない志郎だけの秘密の場所だった。ライブイベントは成功の内に終わり、4人で組んだユニットの評判も上々だった。だが、ユニットに対して高まる評価とは裏腹に、志郎自身への課題は山積されていた。

時田は実力不足――

別の練習生を当てた方が――

スタッフの噂話は、デビューのチャンスを手放しかされ、ナーバスになっている志郎の耳に、嫌でも入って来た。

ガラス窓を鏡代わりにして、階段の下で汗の珠を飛び散らせながら志郎は踊る。踊っている内に目に入った汗が染みて、泣きたくないのに鼻の奥までツンとして、涙が出てきた。

頬を伝う涙を振り払うように、ダンスのリズムを上げる。

息が上がるに連れて、苦しくなっちゃったりあげながらも、志郎は踊り続けた。

「……志郎」

ふと声をかけられ、驚いた志郎は踊りを止めて、声のした頭上を見上げる。

見れば階段の上に、高瀬が立っていた。

「皆の前で怒られて、悔しいか？」

高瀬はトントンと革靴の底を響かせて、階段を降りて来た。

「……別にっ」

志郎は泣いていたことを気付かれなくて、汗を拭うフリをして服の袖で頬の涙を拭った。

「透は天才としか言いようが無いし、和臣みたいな声量もない。上手いか下手かは別にして、彬のようなワケの分からない色気もない。お前の歌は、確かに“平凡”だ」

今の志郎にとっては、グサツと心に突き刺さるようなことを、高瀬は躊躇することなく口にする。

言葉に詰まり、思わず俯く志郎の顎を掴み、高瀬は無理やり彼の顔を上げさせた。

「だから、せめてダンスでは誰にも負けないように、そう思って陰で一人で練習して来たんだろう？」

キョトンとする志郎の顎を掴んだまま、高瀬はこれまで見せたことの無いような優しい微笑を浮かべた。

「お前は隠れてるつもりでも、丸見えなんだよ。俺のオフィスから」

そう言つて、頭上を仰ぎ見る。

高瀬の視線の先を追つて志郎も事務所が入ったビルの壁を見上げた時、なるほど、音響室のすぐ隣りにある高瀬のオフィスの開け放した窓から、初夏の風にヒラリと揺れるカーテンが見えた。

「見てたよ、ずっとな。お前が事務所に入った時から、ずっと」

今までずっと、誰にも見られていないと思つていた練習中の余裕のない自分の姿を見られていたかと思うと、志郎は恥ずかしさに居たたまれない気持ちになつた。しかも、事務所に入つた時からずっと、そんなに長い間気付かずにいたなんて。

俺つて、格好悪すぎる――

思春期の只中にいた彼には衝撃の事実だつた。

真つ赤な顔をして高瀬の手を振り払う志郎に、高瀬は問いかける。

「今度の選抜大会、出るつもりなのか？」

それは、事務所内で不定期に行われるオーディションで、歌唱部門やダンス部門、それぞれで優勝しスタッフの目に留まると、デビューが早くなると噂される重要な大会だつた。事実、幾人もの先輩アイドルたちが、その栄冠を手にデビューを飾つていった。

「……透も出るから、勝負にならないかもしれないけど」

志郎は俯きながら、小さな声でそう呟いた。

高瀬はいきなり志郎の肩を掴み、まだ高瀬より幾分身長の低い志

郎の目線に合わせて言った。

「だから、お前は伸びるよ。志郎」

いつもの“鬼教官”の顔はそこにはない。
厳しくて何度も本気で泣かされたことも数知れない“親父さん”
の、どこまでも優しい笑顔が広がっていた。

「自分が大した器じゃないって、認められる奴が一番強いんだ」

拭いきれずに、頬を汚した志郎の涙の跡を、高瀬は太い親指で擦る。

「大会が終わったら、またレッスン付けてやるから来いよ。ダンスは教えてやれないから」

「親父さんのダンスなんて、見たくねえよ」

泣き笑いの表情で悪態をつく志郎の丸い頭を、高瀬はグシャグシヤに撫でてやった。

高瀬が紡ぐ音階に合わせて、志郎は丁寧に音を追う。

目を閉じたままキーボードを弾く高瀬は、そんな志郎の歌声にじっと耳を傾けていた。

やがて鍵盤の上を往復していた高瀬の指が止まり、静かに膝の上に置かれた。

「何か言ってくれよ。親父さんが大人しいと怖い」

急にブースに訪れた沈黙に気恥ずかしくなった志郎が笑う。

高瀬は目を閉じたまま、しみじみと言った。

「……随分、練習してきたんだな」

穏やかで、慈愛に満ちたその言葉の響きに、志郎はただ呆けたように高瀬を見つめていた。

そんな志郎の視線の先で、高瀬の身体がグラリと傾いだ。

「……親父さん？」

そのまま、倒れ込むように機器の上に崩れ落ちる。

「親父さん?! 親父さんっ!」

慌てた志郎が高瀬の身体を抱き、懸命に呼びかける中で、高瀬は目を閉じたまま、静かに意識の底へと沈んでいく。

（親父さん！ 俺、優勝したよっ！ ダンス部門で、一位になったよ！）

フツと、高瀬の口元が笑みの形に綻ぶ。

薄れゆく意識の中で、高瀬の脳裏には、優勝の楯を手に嬉しそうにレッスン室に駆け込んできた、幼い日の志郎の姿が浮かんでいた。

陽の落ちる時間が大分早くなってきた。

まだ慣れない、アパートまでの帰路を急ぎ足で歩いて、薄暗い部屋のキーを回す。

4人で過ごした宿舎は、ほぼそのままの形で出て、二週間前からこの郊外のアパートに移り住んだ。

志郎と二人だけになってからの宿舎は、広く虚しく感じられて堪らない気持ちにさせられたが、新しいこの部屋は以前よりも狭い間取りと、一緒に住んでいる志郎が散らかし魔なお陰で、持て余す空間が少ないことが皮肉にも和臣の救いになっていた。

宿舎を出た方がいいと提案したのは、志郎の方だった。

表向きは、タレント活動のない自分たちがいつまでも宿舎に居残ったのでは、後輩たちへの影響も良くないということだったが、本音の部分では未だ不安定な和臣の精神状態を考慮しての決断だった。良くも悪くも4人の思い出が詰まったあの場所では、和臣の心の状態は改善できない。

マネージャーとも相談の上、引越すことに決めた。

ここは和臣の通う大学からも近く、周囲には学生たちが暮らす小綺麗なアパートが多い。静かで落ち着いた街並みをすぐに和臣も気に入った。

「もう、またこんなに散かして」

玄関を開けた途端に、夕闇に沈みかけた部屋の雑然とした様に、和臣は溜息を漏らす。

履いていたスニーカーの踵をそろえてきちんと玄関に並べると、和臣はズカズカと部屋の中に踏み込んだ。

「本当に、志郎さんってA型なんですかね？ あの人を一人にしたら、きつと三日でゴミ屋敷ですね」

ブツブツ一人言を呟きながら、志郎が脱ぎ散かした服を拾って歩く。ここに越してきてから、誰に決められたわけでもないが、自然に家事をこなす自分がいた。宿舎に居た頃、一日の大半を廃人のように過ごしていた日々から思えば、信じられない進歩だった。

買ったばかりのテレビの周りには、ラックから飛び出したDVDまで散らかっている。

「まさか、僕のいない間にHなヤツでも見てたんじゃないでしょうね。やりそうですね、志郎さんなら」

和臣は右目を細めて、リモコンを探す。

「エロビデオならぶっ殺す。でも、ダビングさせてくれたら、許す」

独り言に自分で笑いながら、好奇心のままにリモコンのスイッチを押した。

暗い画面から徐々に浮き上がる映像、その瞬間、和臣の視線が止まった。

聞き覚えのある、笑い声。

声変わりしたての、今よりも高く幼い声が静かな部屋に響き渡る。

『……今回の、全国ツアーの一番の思い出は？』

記者の質問に身を乗り出し、嬉々として答える自分の姿が映る。

『透さんが、リフトステージからマイクを落としたこと！ 代わりに、僕が透さんのパートを歌ってあげようかと思ったけど、面白いからやめました』

『ひっどいな！ お前っ』

後ろの列に座っていた透の小さな手が、ポカッと和臣の頭を殴る。途端に、記者やメンバーの間からドツと笑い声が漏れる。

ブラウン管の向こうの賑やかな様子とは裏腹に、暗い部屋で一人画面を食い入るように見つめる和臣の瞳には、過ぎし日の映像が、チラチラと微細な影を伴って揺れるばかりである。

バサッ――

和臣の手から、手にしていた洗濯物の山が零れ落ちた。

＊

「悪い、和臣。親父さんのところに寄ってたら、遅く……」

ガシャーンッ！

志郎が玄関に入るなり、物が割れて弾け飛ぶ大音響が鳴り響いた。

「和臣っ?!」

ただ事でない音に驚いて、志郎は慌てて電気さえついていない暗い部屋へ駆け込む。

「お前……一体、何……?」

そう言った次の瞬間、志郎の目にDVDが挿入されたままのデッキのランプが見えた。夕べ、和臣が寝てしまった後に見ていたものだ、志郎にはすぐに察しがついた。

自分の犯してしまつた失態に舌打ちしたい気持ちになりながら、志郎は和臣を見つめる。

飛び散るガラスの破片――。

投げつけた花瓶と破壊されたブラウン管の残骸が、素足の和臣の足元で、窓から入り込む街灯の明かりに照らされ、キラキラと輝いている。

「……和臣」

かける言葉が見つからず、掠れた声でただその名を呼ぶことしか出来ない。

和臣はガラスの破片の上に、崩れ落ちるように膝をついた。小さくとも鋭く尖つた凶器の欠片たちは、和臣の薄い皮膚を突き破つて、心だけでは飽き足らず、彼の身体にまで傷を負わせる。

「……僕が今一番、何を許せないのか、分かりますか?」

膝からドクドクと流れ出る血もそのままに、和臣は静かに志郎に問いかける。

「自分です……何も知らずに、無邪氣にあの人の後ろばかりをついて回った、吐き気がするくらい、バカで単純で、あの人しか見えていなかった自分です……そして、それがいつまでも続くものだ、信じて疑わなかったあの頃の……自分のバカさ加減を、僕は何よりも憎いと思う」

手で顔を覆い、そのまま泣き崩れる和臣に、志郎はもはやかける言葉が見つからなかった。

この一年で大分伸びてきた和臣の髪に、飛び散ったガラスの欠片が輝いている。

取ってやろうと伸ばしかけた手を、志郎は再び握りこんでしまった。

「悪いな、志郎。お前にこんなことまでさせて」

ベッドの横で危なっかしい手つきでリンゴを剥く志郎は、集中の余り細い目を中央に寄せて文句を言う。

「本当だよ。みっちゃんにやってもらえばいいのに」

口ではそう言いつつも、志郎は一日も休まず病院に通ってきては、甲斐甲斐しく高瀬の世話を焼いた。

「和臣の様子はどうか？ 大学に通ってるんだろっ？」

ナイフを持った志郎の手が止まる。

「……元気だよ。昼間はね」

そのまま長い沈黙が続く。

「……テレビ壊したことは、言っただけ？」

苦い顔をして高瀬が頷く。

「昨日は、透が置いていった携帯に、夜中ずっと電話かけてた。あいつの電話は宿舎に置いたままで、出ないこと知ってるのに」

「あいつは一番、透に懐いていたからな」

高瀬も顔を曇らせる。

その時ようやく、妻の美津子が病室に姿を現した。

「遅いぞ」

「ごめんなさいね。先生とちょっと話があったから」

気のせいかな、美津子様子は落ち着きがなく、困ったような顔で高瀬と志郎を見比べていた。

「俺、帰るね」

その様子を察して、志郎が席を立つ。

「ごめんなさいね、志郎君」

「いえ、また明日来ます。じゃあね、親父さん。みっちゃんに戻って来たんだから、リンゴも剥いてもらって、うんと甘やかしてもらえよ」

そう言つて高瀬をからかいながら志郎が出て行くと、高瀬は静かに美津子に向き直った。

「どうした？ 美津子」

今にも泣き出してしまいそうな妻に、全てを告げさせるような酷なことはしない——高瀬の目は優しくそう語っていた。

「俺は大丈夫だから、本当のこと、言っていいいんだぞ。春までか？ そんなにもたないか？」

「あなた……」

そのまま泣き崩れる妻の背を抱いて撫でながら、高瀬は静かに言つた。

「急がないとな」

そう言つて、枕の下を探る。

コツンと小さく高瀬の指先に触れたデモテープを取り出し、高瀬はそれをしっかりと胸に抱いた。

*

「志郎さん、お客さんです」

レッスン室で汗を流していた志郎に、後輩の練習生が声をかける。

「客？」

首にかけたタオルで汗を拭いながら振り返った志郎の視線の先に、戸口のところで戸惑いがちに佇む美津子の姿が見えた。

「みっちゃん？ どうしたの、こんなところに」

驚いて駆け寄る志郎に、美津子は申し訳なさそうに言った。

「話があるの。少し、いいかしら？」

志郎は頷き、事務所のロビーにある小さな喫茶室へ美津子の背を押して連れて行った。

「……高瀬はね、もう長くないの」

向き合った志郎に、美津子は声を詰まらせながら切り出した。

夏に倒れて志郎が病院に運び込んだ時には、既に病はかなり進行した状況だった。周囲への影響を考えて検査入院ということにしていたが、実際手術で開腹した時には、既に手の施しようがない状態で、そのまま何もせずに開腹した傷を縫い合わせただけだった。

ずっと、美津子だけの胸に閉まっているつもりだったのに、本人は最初から分かっていたと言う。

突然の美津子のこの告白に、志郎は頭の中が真っ白になった。

高瀬が死んでしまう――

事務所に入った、ほんの子どもだった頃から、常に厳しく、だが時には誰よりも温かく見守ってくれた、肉親以上の愛情で包んでくれた恩師が、志郎の前から姿を消してしまう。生きることの基盤だったZion^{ジョン}を失った自分から、神はこれ以上何を奪うと言うのか。

哀しみよりも、志郎は理不尽なこの運命をどこかで弄んでいる神への、どうしようもない怒りの気持ちの方が先に立っていた。

膝の上で握り締めた手を奮わせる志郎に、美津子は静かに言った。

「……この業界で生きた三十年間で、あの人は色々な歌手を手がけたわ。でも、その中でも、あなたたちは特別だった。あの人の最後で、最高の教え子たちだって、Zion^{ジオン}はあの人の誇りだったって、いつも口癖のように言っていたわ」

震える志郎の手を取って、美津子は頭を下げる。

「……あの人の最後の願いを、どうか叶えてあげて」

玄関の明かりが着く。

ドアの開く音がして、二人分の足音がアパートの中に入って来た。

「じゃあな、和臣。明日も早いんだからさっさと寝ろよ」

「はい」

「志郎！ 俺、そのまま事務所に戻るからな」

マネージャーの北村は部屋の奥にいるであろう志郎に声をかけて、そのまま玄関の扉を閉めた。

カッンカッンカッン……とリズムカルな音を立てながら、北村がアパートの階段を降りていく音が遠ざかる。

「ただいま……って、ビックリした。居るなら居るって言うてくდაさいよ、志郎さん」

真っ暗なりビングのソファーに座っていた志郎の姿を見つけて、和臣は思わず足を止めた。

「どうしたんですか？ 明かりも付けないで」

和臣はリビングの電気に手を伸ばすと、パチンと音を立てて部屋の明かりを着けた。

「カーテン、閉めてくださいね」

和臣はそう言うと、自分は床に荷物を投げ出してキッチンに入
た。

大学へ通い始めるのとはほぼ同時に、和臣はモデルの仕事を入れる
ようになっていた。

身体を動かした方が、余計なことを考えずに済むのではないか。
マネージャーの北村を初めとする、周囲の配慮だった。

大学の講義が始まる前の早朝や、課業後の短い時間、和臣はマネ
ージャーに付き添われて撮影に赴いた。

和臣は冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターのボトルを捻る
と、それを一口飲み干して、また元の場所へ戻した。

「僕、疲れたからもう寝ますね」

「ちょっと待て」

そう言っ
てリビングを横切ろうとした和臣を、志郎が鋭く呼び止
めた。

「夕飯は？」

「食べて来ました」

「何を？」

「……何で？」

いつもと様子の違う志郎を、和臣は怪訝な顔で振り返る。

志郎は先ほど和臣が帰って来た時に、ソファに腰をかけていた
姿勢から一歩も動かずに、正面を見据えている。和臣の方を見よう
ともしない。

「北さんに、何食ったか電話して聞くぞ」

これには、和臣の方がカツとして言い返した。

「何でそんなにお節介なんですか？ 僕が何を食べようが食べまいが、志郎さんには関係ないでしょ。放っておいてくださいよ」

「ちよつと、来いっ！」

志郎は弾かれたように立ち上がって、和臣の手首を掴んだ。

「ちよつ……何するんですか？ 離してくださいっ！」

志郎は有無を言わず、自分よりも体格のいい和臣を引きずるように玄関へ向かう。アパートの階段の踊り場に出ると、その場で勢いよく和臣の身体を突き飛ばした。

「……っつ」

踊り場の鉄柵の思い切り身体をぶつけて転がる和臣は、志郎を見上げて怒鳴り声を上げた。

「いきなり、何するんですかっ！？」

「うるせえっ！！」

しかしそれ以上の怒気を含んで、志郎は顔を真っ赤にしながら、噛み付くように叫んだ。

「いつまで被害者面してれば気が済むんだよっ？！ 透はいなくなった。彬にさらわれたワケじゃない。あいつが自分の意思で行ったんだ。彬だって、自分から、Zion^{ジョン}を捨てた……もう、いい

加減認めろよ。現実を見ろっ！ テレビを壊しても、置いてった携帯に電話しても、いくら飯を抜いてガリガリに痩せても、透は戻って来ないっ！ 戻って来れないんじゃない。あいつがそう決めたから、もう戻って来ないんだっ！」

髪を振り乱しながら一息に叫ぶ志郎の顔は、これまで一度も和臣には見せたことのない表情だった。本気で感情を剥きだしにするのに釣られる形で、和臣の心も裸になる。

「……そんなこと、分かってますっ！」

泣きながら立ち上がり、その反動で思い切り志郎に殴りかかる。体格差のある和臣に押され、今度は志郎が反対側の鉄柵まで吹き飛ばされた。

「分かってねえっ！」

切れた口元の血を拭いもせずに、志郎は血の混じった唾を飛ばしながら和臣に向かって叫ぶ。

「Zion^{ジョン}は、俺らだけのものじゃない。嫌になったから、上手くいかなくなったから、思い通りになくなっただから……勝手に辞めたり出来るもんじゃない筈だろう？ だったら何でこの一年間……何の価値も無くなった俺たちを、事務所は置いていてくれたんだ？ 飯や住む場所の手配まで……稼ぎのない俺たちを、養ってくれたんだ？ まだ、終わってねえからだよ。終わらせちゃいけないんだ」

志郎の叫びは、終わりに行くにつれ徐々に震えを増していく。

「……親父さんの作ったZionを……終わらせちゃ……いけねえんだよ」

膝を抱え、丸い頭をその足の間に埋める志郎の声は、徐々に聞き取れないほど弱々しくなっていた。

「……志郎さん？」

志郎の涙を、和臣は本当に久しぶりに見た気がした。

幼い頃、お互いにレスンが辛いと泣いていた覚えはあるが、和臣の記憶の中の志郎は、和臣が事務所に入った時からの3つ年上の先輩で、いつもふざけてお調子者で、明るい笑顔を絶やさない、屈託のない少年だった。口は悪いが面倒見が良くて、先輩後輩を問わず、皆に慕われていた。和臣も口では反抗しながらも、Zionのリーダーとして、精神的な部分で随分甘えていたと認めざるを得ない。だから、大人になってからは特に、志郎がこんな風に泣く姿など、想像したこともなかった。何となく、志郎はいつも樂觀的で、涙を流すような機微を持ち合わせていない男のように感じていた。そんな筈は無いのに。

「……高瀬先生に、何かあったの？」

和臣は恐る恐る、泣いている志郎に近づいて行つた。

しゃがみ込み、うつぶせている志郎の丸い頭を見つめる。

「志郎さん……どうしたの？ 何があったの？」

静かに嗚咽を漏らす志郎が落ち着くまで、和臣は傍らに座り込み、志郎の涙が乾くのを待った。

「おお、どうした？ 珍しい顔だな」

病室に現れた長身の男二人の登場に、高瀬は心底嬉しそうな笑顔を見せた。

「ご無沙汰してしまつて、すみません。だけど、思ったよりも元気そうですね。高瀬先生」

「おう。お前の方が不健康そうだよ。ちゃんと食ってるのか、和臣？ お前は昔から何かあるとすぐ食が細くなる。男のくせにそんな繊細でどうするんだ」

「ちゃんと食べてますよ。それに痩せたんじゃない。モデルの仕事用に鍛えてるから、引き締まったんです」

病院へ来る前、志郎とは高瀬の病状について知らないフリをしようと決めていた。

「和臣も来たなら丁度いい。お前ら、ちょっとそこへ座れ」

高瀬は和臣たちを手招きして、二人をベッドの両サイドに座らせた。

「お前らに、渡したいものがあるんだ」

高瀬はそう言うと、傍で控えていた美津子に声をかけ、一本のCD Rを持って来させた。

「……これは」

高瀬から手渡された手の中のそれを見つめながら、志郎が口を開く。

「墓場に行つて行つても仕方ないからな。これは、お前らの曲だよ。お前ら、Zion^{ジョン}の曲だ。貰ってくれるか？」

それは、幻に終わってしまったツアーの千秋楽の後、この一年半の歳月をかけて作り上げた曲だった。病に倒れた後も、病室ですつと作曲活動を続けていたという。

一生、陽の目を見ることが無くてもいい。

発表出来る場所が無かったとしても、形見分けのつもりで受け取つて欲しいと、病室を後にする時、二人を送りに出た美津子から、涙ながらにそう言われた。

高瀬もそのつもりでいると。

手に残ったデモテープと、深々と頭を下げる美津子の前で、志郎と和臣は二人で顔を見合わせた。

事務所の音響室を借りて、手にしたばかりの高瀬のデモテープをかける。

狭いブースに鳴り響く音の嵐を聞き終わった瞬間、意識とは別なところで、和臣の目から大粒の涙が零れ落ちた。

隣りで腕を組んだまま音に聞き入っていた志郎は、絶句したまま言葉を紡げずにいた。

「……これ」

途切れ途切れに息を継ぐように、和臣がシャツの胸元を掴んだまま声にならない声を絞り出す。

（これは、お前らの曲だよ。お前ら、^{ジオン} Z i o n の曲だ――）

高瀬の言葉が蘇る。

曲のタイトルは、“^{ヒース} H e a r t h ”――。

イギリス北部、アイルランド地方に広がる広大な荒野をテーマに据えた曲だった。

唸りを上げてメロディラインに絡み付く低いギターの音は、荒野を吹き荒れる嵐の風音に聞こえた。

何も無い、荒野に二人きり……

事務所の会議室の対面に座ったマネージャーの北村は、あまりの衝撃に声も出せない様子で、目の前に座る志郎と和臣の顔を交互に見比べた。

「もう一度、言ってみろ」

「俺ら二人で“Z i o n”^{ジョン}の千秋楽をやります」

「正気か！？ お前ら」

机を叩いて、北村が叫ぶ。

「彬と透がいないのに？ 二人でどうやってやるって言っただ？ 一年半前、最後の舞台に穴を開けて以来、グループとしての評判は地に落ちてる。スポンサーだって着くかどうか……」

長年敏腕マネージャーとしてならしてきた経験から、瞬時に弾き出される、“二人のZ i o n”^{ジョン}に関する今後のプロモーション展開は、絶望的だった。

「俺だって、お前らのことはちゃんと考えてる。歌う場所が無くなっただって、和臣はモデルの仕事が入り始めてる。これから演技力を磨けば、俳優としてやっていくことだって夢じゃない。志郎は、元々人に好かれやすい性質だ。お前を使いたがってるバラエティのディ

レクターは沢山いる。焦らなくても、事務所もお前らを一人のタレントとしてこれからも育てて行く気にいるんだ」

「北さん、俺らは別に自分たちの将来を心配して焦ってる訳じゃないんだ」

二人を何とか説得しようとする北村に、志郎は丁寧の説明する。

「Zion^{ジオン}を作ってくれた皆に、きちんと見せたいんだ。長い時間と金と、それだけじゃ計りしれない愛をもらったグループですって……感謝の言葉もなく、俺らの勝手に終わりにしたくないんだよ」

「第一、曲はどうするんだ？ 一年半のブランクがあるんだぞ。千秋楽規模のキャパの会場を埋めるには、プロモーション活動でもしなけりゃ、人を集められない。厳しいことを言うが“Zion^{ジオン}”はもう過去のグループなんだよ。今更、お前らに新曲を書いてくれる人間なんて……」

北村の言葉に、和臣がスツと机の上に何かを差し出した。

「これは？」

デモが収められたCDRには、高瀬のサインが入っている。

「高瀬先生が“Zion^{ジオン}”のために、最後に書いてくれた曲です」

北村は思わず先の言葉を継げなくなってしまった。北村も、高瀬の病状があまり芳しくないことは知っていた。

「一度で良いから、ちゃんと聞いてみて下さい。そしたら、北村さんもきつと、僕らの気持ちを分かってくれると思います」

頭を下げる和臣の前で、北村は恐る恐るCDに手を伸ばした。

無言で立ち上がり、そのまま部屋を出て行く。隣のミキサー室の戸が開き、また閉まる音が聞こえて来た。

部屋に残された二人は互いに言葉を掛け合うこともなく、膝の上に置いた手を強く握り締めた姿勢のまま、北村が戻ってくるのを待った。

しばらくして、静かに部屋のドアが開いた。

弾かれたように顔を上げる二人の前で、北村はドアのところに立ったまま、ただ一言呟いた。

「……本気か？」

二人はほぼ同時に、強く頷いて見せる。

北村は目を閉じ深い溜息を吐き切ると、決意したように顔を上げた。

「全盛期真っ青の、地獄のスケジュール組むからな！ 泣き言言ったって許さない。この一年半、鈍ってた身体叩きなおせよ！」

「はいっ！」

叫ぶように二人の声が重なる。

志郎と和臣は互いに顔を見合わせ、何となく気恥ずかしくて視線を逸らす。

やがて志郎が片手を上げて、再び和臣に視線を戻す。

和臣はそれに応えて、バチンツと音が鳴るくらい、自分の手の平を、上げた志郎の手の平にぶつけた。

「痛ってえな……」

志郎は片目を細めて、手をプルプルと振りながら、大げさに痛が

って見せながらも、その顔からは笑みが零れていた。
和臣もそんな志郎につられて少し笑った。

『^{ジョン} Z i o n ” 復活!! 』

『 “ 幻の千秋楽 ” 開催決定 』

^{ジョン}二人の活動再開のプレス発表をした途端、新聞の見出しには“ Z i o n 復活 ” の文字が踊った。北村がそのキヤパを埋められるか懸念していた二人の舞台は、一年半前に千秋楽が予定されていた武道館だった。

年明けすぐのシングル発売と、それに合わせた一晚限りのライブの決行。

年末に向けた本格的な活動再開の中で、二人は忘れかけていたあの嵐のようなスケジュールをこなす生活に再び突入していた。

だが、ダンスやボーカルレッスンの合間、マスコミからの取材は一切シャットアウトした。事務所のガードも過敏になり神経を使っている様子が窺えた。

マスコミやファンが知りたいのは“ 解散 ” の真相。

二人きりでの“ 復活 ” の裏に隠された真相を暴きたてようと、ネットや報道は加熱の一途を辿った。出て行った彬や透へのもどかしい思いを、沈黙を貫く志郎や和臣にぶつけるファンもいた。

「志郎、和臣っ！ こっちだ！」

北村が用意してくれてスタジオからスタジオへの移動の車までの

短い距離も、詰め掛けたファンやマスコミの人ごみに阻まれて、たどり着くのも至難の技だ。

人より頭一つ抜け出た長身の和臣は、どこまでも広がる黒い頭の花に人酔いしそうになりながら、道を開けてくれる北村の後についていく。

その時、ふと視界に道を塞ぐファンの一人が持ったプラカードの文字が入って来た。

『二人の“Zion”なんて、“Zion”じゃない』
『“Zion”の名前を語るな』

凶器のような言葉の刃に思わずグラリと眩暈を覚えそうになったその時、後ろを歩く志郎の周囲からざわめきが起こった。

「志郎さん？」

何事かと振り返った和臣の目の前で、志郎の丸い頭を覆うサラサラとした髪が、黄色い粘着質の液体でベツタリと汚されていた。当の志郎は額に垂れてくるその液体を手で拭いながらもキョトンとしている。

自分の身に何が起こったのか、すぐには把握出来ないらしい。

志郎よりも先に頭に血が上ったのは和臣の方だった。

「つこの野郎っ！」

育ちの良い和臣らしからぬ言葉を吐き捨てて振り返ると、一人の少女が慌てて背を向けて、人ごみの中に隠れたのが見えた。和臣はその少女に向かって地面を蹴った。

「和臣?!」

先を歩いていた北村が止める間もなく、和臣は人ごみの中に分け入っていく。

「止めろっ、和臣っ！」

人垣に阻まれる北村の虚しい制止の声だけが響き渡り、周囲のざわめきは尚一層激しくなる。人ごみの中で青ざめて震える少女の襟首に和臣の手がかかったその瞬間、和臣は後ろから強く腕を引かれた。

「止めろっ！」

和臣の腕を背後でガッチリと固めて、志郎が厳しい顔で和臣を戒める。

「離してください、志郎さん」

もがく和臣を押さえつけたまま、志郎は彼を引きずるように元の車までの道へ連れ戻す。

「あんな……あんなことされても、平気なんですか？ 志郎さん？」

頭を汚したままの志郎は押し黙ったまま、和臣を投げ入れるように車に放り込む。そのすぐ後から自分も乗り込み、ファンやマスコミが押し合いへし合いする中で無理やり車のドアを閉め発進した。

「志郎さんっ！」

焦れて声を上げる和臣に、志郎は静かな声で言った。

「こんなの、大したことじゃない」

既に乾きはじめている黄身を叩きながら、志郎は真っ直ぐに前を見据える。

「俺らがやろうとしてるこの前では、どんなことだって大したことじゃない」

覚悟を決めるよ、和臣――

無言で送る志郎のメッセージは、深く和臣の心に響いた。

シングル曲のジャケットは、タイトルである『^{ヒース}Heart』の名の通り荒野をイメージし、徹底して色味を排除したモノクロ一辺倒の仕上がりだった。

企画会議で二人もいる中で示されたそのデザインを見た時、彼ら二人だけでなく、その場に居たスタッフ一同が動揺を隠せなかった。メンバー個々のイメージカラーを想定し、色彩豊かなステージ作りが売りの一つでもあった“^{ZION}Zion”の時とは、明らかに違っていた。

プロモーションビデオの撮影に選ばれたのは、地方都市の外れにある、朽ちかけた教会だった。酷く古い代物だったが、その独特の趣が好まれて、ドラマや映画の撮影では珍重される有名な建物だった。

実は“^{ZION}Zion”として出した、セカンドシングルのプロモーション

ンビデオの撮影時に、使用した場所でもあった。

先に志郎が外で撮影を行っている間、和臣は礼拝堂の中へ進んだ。

あの日と同じ場所に立ち、同じ景色を見ている。

まだデビュー間もなく、ぎこちないダンスしか踊れなかった自分。撮影監督の要求に応えられず、カメラに囲まれながら祭壇の前で何度も同じ振りを繰り返すが、一向に監督のOKが出なかった。

（和臣！ 見てろよ、こうやるんだよ）

徐々に青ざめ、振り自体も小さくなっていく和臣を見かねて、礼拝堂の奥の椅子に座って撮影を眺めていた透が立ち上がった。

通路に出てきて、流れるスローバードに合わせて、滑らかに踊って見せる。

（こ……こっ？）

和臣は思わず横を向いた。

祭壇の前で縋るような目で透を見つめている、幼い日の自分の姿が見える。

（もっと、切ない顔しろー）

祭壇から一番近い前の席には、まだ“悪ガキ”という形容詞が一番似合っていた頃の志郎が、面白そうにチャチャを入れる。

その隣りでは、やる気なさげな彬が、椅子の肘掛に頭を乗せて居眠りをしている。

（和臣、見てて！ もう一回）

透は背中を向けて、和臣が分かりやすいように同じ方向に身体を向けてステップを踏み直す。

さっきまで上手くいなくて、泣きそうな顔だったのはどこへやら。

尊敬の眼差しを隠しもせずに、一心に透の背中を見つめる幼い日の自分がいる。

見えています——昔も今も、ずっとあなただけを見ていたんです。

踊る透の背中。

透はいつの間にか、和臣に見せることよりも、自分自身のダンスにのめり込んでいく。

振り返らないその背中を、それでも幼い和臣は見つめ続ける。憧憬に溢れたその瞳には、いつしか焦燥の色が混じっていく。

恋が何かも知らない幼い日々から、僕は知っていた。いつも、“見つめる”のは僕の方ばかりだと。

「……今度は、あなたが見る番だよ」

誰もいない礼拝堂に、低く呟く和臣の声が零れて落ちる。

どこかで見ているんでしょう？——

もう、あなたの背中ばかりを追っていた、幼い僕じゃない。見ていて、透さん。

僕らにしか出来ない、“Z^{ジオン}i o n”を見せるから。

爪が食い込むくらい、グツと強く拳を握り締める。

「和臣さんっ！ 撮影入ります！」

レコーディングスタジオの中、ブースの向こうで歌う志郎と和臣を見つめながら、音響ディレクターは思わず息を呑む。

低音の志郎のパートの上を、泣き叫ぶようなハイトーンで歌い上げる和臣。

額と鼻の頭に汗を浮かべながら、絶唱する二人を気遣い、彼はブースの向こうの二人に休憩の合図を送る。

ヘッドフォンを外したディレクター自身もようやく息をつく。そこで初めて、短期間で凝って張ってしまった肩や背中の筋肉の様子から、自分がかかなり緊張した状態で彼らの歌を聴いていたのだと知った。

「高瀬先生らしいけど、メロディライン自体が狂気の沙汰だ」

「確かに狂気の沙汰だろうな……“^{ジョン}Zion”以外の歌手にとって
は」

誰にとも無く呟いた言葉を拾われて、ディレクターは驚いて振り返った。

「高瀬先生っ！」

そこには、美津子に車椅子を押されたやせ細った高瀬の姿があった。

点滴を引きずりながらスタジオに足を踏み入れる高瀬の姿に、ブー
スの向こうにいた志郎と和臣も気がつく。

先ほどディレクターが置いたヘッドフォンを手に取り、ミキサー
室から二人に声を送る。

「聞かせてくれ。 “お前らの歌”を」

ディレクターは周囲のスタッフに目配せして、再び音楽をかけさ
せる。

絡み付くギターのイントロがスタジオに流れ始める。

激しい曲調に合わせて、二人のボーカルが重なる。

サビでは咆哮する和臣の声が、音の荒野を響き渡る雷鳴のように、
曲自体を引き裂いていく。

『神よ、どうかお救い下さい——』

魂の底から搾り出される二人の叫びに、高瀬は静かに深く頷いた。

曲の発売を前に、テレビCMや動画サイトでデモやジャケット写
真の一部が出回るようになると、視聴者からは思いがけない反応が
返って来た。

『カッコいい。でも、何だか怖い』

『今までの“Zion^{ジオン}”じゃないみたい』

ダンスレッスンの休憩中、スタジオの床に胡坐をかいて座る志郎は、マネージャーの北村が持ってきた市場調査の結果を読みふける。その横には、タイトル曲である『Hear^{ヒス}th』のCDジャケットに使われる写真のポラが散らばっている。

ポラには、デザイン違いの黒い衣装に身を包んだ志郎と和臣の姿が、微妙に角度を変えたいくつかのポーズを決めて納まっている。そのどれをとっても、白と黒以外の色味は無く、被写体の二人に笑顔は無い。

長くスラリとした腕が伸びてきて、その中の一枚を拾い上げる。彼が拾い上げたそのポラの中には、腕を組んだ姿勢で仁王立ちする志郎と、その横で膝を立てて椅子に座る和臣の姿が映っていた。二人とも、何かに挑みかかるような視線で、カメラを睨んでいる。

「何か僕たち、悪魔みたいですね」

他人事のように、和臣は苦笑する。

「上等じゃねえか。悪魔は美形って相場が決まってるんだよ」

座りこんだままの志郎は、和臣を見上げて笑う。

「じゃなきゃ、“死神”？」

志郎が読んでいた、市場調査の資料から零れ落ちた、ファンの声が掲載されている調査書の一枚を摘み上げて、和臣はそこに書かれた一言を読み上げる。

ハッと声を上げて笑ったのは、志郎の方だった。

「確かに。俺もお前も、人を殺しそうな目してるもんな」

「いけませんか？」

尋ねる和臣に、志郎はニヤリと笑みを深くする。

「いや、最高」

志郎は足を組み替えながら、和臣にも座るように顎をしゃくる。

「なあ、和臣。お前“^{ヒース}Heart h”のもう一つの意味、知ってるか？」

唐突な彼の言葉に、和臣は怪訝な顔で問い返す。

「“荒野”以外に、意味があるんですか？」

「何だよ。チーム一の頭脳派のお前が知らないの？ 大学行つたの、お前だけなのに」

「余計な話はいいから、さっさと教えてくださいよ」

すぐにふざけようとする志郎に、気の短い和臣が先を促す。志郎は肩を竦めて舌を出しながら、本題へと戻る。

「“異教徒”って意味だよ。キリスト、ユダヤ、イスラム……それが自分たち以外の宗派を指して“^{Heart hen}”って呼ぶんだ。俺らにピッタリだと思わないか？」

志郎の真意が分からずに、和臣はパツンと切りそろえられた前髪の奥に覗く、志郎の細い目を覗き込んだ。志郎はそんな目をさらに細めて続ける。

「何が“本物”かなんて分からない。彬や透のファンからしたら、

俺らは“Zion”^{ジオン}じゃない。俺らが“異教徒”^{ヒース}だろ？」

頼りないばかりだと思っていた男の胸の内に、和臣は始めて真剣に耳を傾ける。

「だけど、ヒースにだって春になれば花は咲くんだけ。いつまでもモノクロじゃねえんだよ」

和臣の広い背中を、志郎の温かく大きな手がバチンツと叩く。それは和臣に向けた言葉であると同時に、志郎自身をも奮い立たせる言葉に他ならなかった。

「……うん……志郎さん」

和臣は静かに、噛み締めるように頷く。

床に散らばったモノクロの世界が、そんな二人を見つめている。

色を失った世界の中でも、氷のように燃える二人の目の輝きだけは、唯一の光として、そこに確かに存在していた。

それは荒野に咲く、たった二輪の野生の花のように。

新しい年が明けると同時に発売された“Zion”^{ジョン}のラストシングル、“Heart”^{ヒース}は、発売と同時に大きな話題をさらった。

『——去って行った二人への、挑発的な歌詞』
『Zion』^{ジョン}の完全なる決別宣言』

これまで志郎と和臣が持っていた素直で健康的なイメージも一新し、何かに取り憑かれたような暗い情熱をまとう二人の歌に、評価は様々だった。

だが、マネージャーの北村やスタッフたちの懸念を余所に、二人で開く武道館での“Zion”^{ジョン}のライブは、発売と同時にほぼ完売した。

期待と好奇の入り混じる目で見守られるステージの舞台の幕が開く。

いつも4人一緒だったステージ。

決まった立ち位置でスタンバイすれば、嫌でも空いた二人分のスペースの不在を実感する。

「いくぞ、和臣」

そんな和臣の手を、隣りに立つ志郎がギュッと力強く握り締める。4人分のステージは、広すぎて持て余すかと思った。

だが、隣りの志郎が大きく見える。

こんなに志郎を大きく感じたことはない。

唸りを上げてヒースを駆け抜ける風のような観客の歓声が、二人を包む。

ある日突然、何も無い荒野に、二人きりで立たされた。

いつまでも続くモノクロの世界に、閉じ込められている気がしていた。

だが、ヒースにもやがて風が吹き春が来る。

志郎と和臣の荒野も、いつまでも凍てついた冬ではいられないのだ。

向かい合い、肩に手をかける志郎の腕を弾き、衣装のはだけた彼の胸を突き飛ばす。

予め用意された振りの一種なのだが、悲鳴に近い観客の歓声の中、向き合う二人にしか分からない無言の会話がそこにある。

本気で殴りあったこともある。

失ったものばかりに思いを馳せ、互いの中に残された自分が見える気がして、故意に目を背けた時期もあった。

だが、いつでもどんな時でも、一人では無かった。

荒野の中で飢えに苦しみ行き先を見失っている時も、気がつけば隣りに、同じように血を流したもう一人の自分がいた。

それがどれほど、互いを救うきっかけになったか知れない。

汗だくになって引き上げてきた舞台袖で、和臣は肩で息をしながら、志郎の背中に向かって語りかける。

「志郎さんって、歌上手かったんですね」

次にソロナンバーを控えている志郎は、汗で張り付く衣装を苦戦しながら脱ぎ捨てると、スタイリストが用意したジャケットを素肌

に羽織る。

「今頃気付いたのか？」

擦れ違いざま、和臣の額を指先で小突く。

舞台袖ギリギリのところに控えた志郎は、真っ直ぐにステージを見つめている。

落とした照明の中、志郎の名を呼ぶファンの声が暗い会場を埋め尽くし、それは徐々に一つの大きなうねりになって、志郎を待ち詫びていた。

「ダンス部門で、一位になったのは？」

そんな中で突然、志郎は背中越しに和臣に語りかけた。

「透じゃないぜ。この、俺様」

親指で自分を指し、胸を張る。

「俺を誰だと思ってんの？ 泣く子も黙る、ダンスの貴公子。時田志郎様だぜ！」

振り向きざま、悪戯っぽく目を細めた志郎は、そのまま光の中へと飛び出して行った。

（いつまでも、モノクロじゃねえんだよ——）

丸い頭を揺らしながら、汗の珠を飛び散らせて踊る志郎は、確かに光り輝いていた。

光の中の、彼のプライド——

志郎とは、特別仲が良かったわけではない。

自分は透ばかり見ていたし、“Zion”^{ジョン}のリーダーでもあった志郎は、自分や透の面倒だけではなく、奔放な彬の手綱を握るのに苦労していた。

優しい言葉も、格別自分からかけたことはない。

何となく、年上の志郎を頼りないとバカにしながらも、不機嫌だったり愛想の無い自分を平気で見せられてきたのは、彼の人柄を知った上で、いつも無条件に甘えていたからかもしれない。

同じチームにいながらも、一人のアーティストとして志郎を見るのはこれが初めてのような気がする。

客席には、高瀬と、彼に付き添う妻、美津子の姿も見えた。

最後の曲“Hearth”の出番が近づいていた。

明かりを消した客席は、薄暗い闇の中に沈んでいる。

落としたライトに照らされるステージでは、背中合わせに互いにもたれ掛かかる、志郎と和臣の姿があった。

どちらからともなく、ズルズルと力が抜けて、クロスするように互いに寝そべる。

「……終わっ たな」

掠れた声で、志郎が呟く。

「……終わりましたね」

それに答えて、同じように掠れ声の和臣も呟く。

「ねえ、志郎さん」

天井のライトに照らされる、埃っぽい会場の細かな砂塵の光を見つめたまま、和臣が語りかける。

「何だよ？」

「……本当のこと、聞いてもいいですか？」

「だから、何だよ？」

「正直に、答えて」

真剣な和臣の口調に、志郎は天井を見上げたまま、黙ってその先に耳を傾ける。

「……志郎さんは、憎くないの？」

思わず身体を起こす。

自分の足元に身体を投げ出して寝そべる和臣の、高い鼻と、形の良い唇が震える様を見つめる。

「聞きたいか？ 本当に？」

身体の向きを変えて、和臣の枕元で膝を抱える。

頑なに天を仰いだままの和臣の横で、志郎は静かに答えた。

「……憎いよ。もう一度あいつらに会ったら、死ぬほど殴り倒してやると思う。だけど……」
「だけど？」

小さく息を吐き出して、志郎は続ける。

「死ぬほど殴り倒した後に、俺はきつと手を差し伸べちまうんだと思う」

その言葉に、和臣はゆつくりと志郎の方へ首を傾ける。

大きな瞳に溜まった涙が零れ落ち、こめかみを伝ってステージの上を濡らした。

「僕は……殺してやりたい」

志郎の方を向いたまま、和臣は大きな身体を丸めて肩を震わせる。

「そしてもう二度と、どこにも行けずに、僕のモノになればいいんだ」

嗚咽を漏らす和臣のセットが崩れた髪に、志郎は黙って手を伸ばす。年長者としての労わりと、傷を舐めあう同志としての想いの全てを託して、ただ黙って優しく彼の髪を撫で続ける。

「だったら、待っててやれよ」

不意の言葉に、和臣が濡れた目を上げる。

「お前は、待っててやれ。あいつが戻って来るのは、スポットライトの下しかないから。誰か一人くらい、明るい場所で待っててやらないや、あいつは迷って戻って来られなくなるだろう？ あいつ、見た目通りドンくさいから」

笑うと無くなってしまふ目を細めて、志郎はいつもの笑顔を向け

る。

「光の下で、殺してやれよ」

そのまま志郎は立ち上がり、トントンと軽い音を立ててステージを下りていく。

和臣が身体を起こして、客席の暗闇の向こうへと去っていく志郎の後姿を追うと、志郎は一瞬だけ振り返り、軽く片手を上げた。

（死ぬほど殴り倒した後に、俺はきつと手を差し伸べちまうんだと思う）

僕と、志郎さんの愛し方は違う――。

心優しい彼は、きつとそう生きるのだろう。

どんなに傷ついて、憎しみに胸を掻き毟られても。

例え、差し出したその手を爪で抉られ、以前より深い傷を負うことになったとしても。

彼は微笑み、血塗れの手を差し出すのだろう。

光の下で生きる運命の男に――。

だけど、今この瞬間、このステージという名の荒野は、他の誰でもない、志郎さん自身のものだ。

“Zion”^{ジョン}のリーダー“時田志郎”のプライドだ。

和臣は立ち上がると、去り行く志郎の後ろ姿に向かって、深々と頭を下げた。

（光の下で、殺してやれよ――）

志郎は、その日を最後にステージを下りた。
“Zion”最後のシングル“^{ヒース}Hea^{ジョン}rth”は、皮肉にも彼らの
歴代シングル最高位の売り上げを見せた。

Ep.2【Hea^{ジョン}rth】完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5465s/>

Bye-bye Baby Blue

2011年8月11日03時35分発行